

劉莊遺跡からみた下七垣文化の社会構造

久保田 慎二

要旨

本論では、これまでほとんど研究がなされてこなかった下七垣文化の階層構造や集団構造について、2012年に刊行された河南省鶴壁市劉莊遺跡の報告を資料として分析を行う。さらに、後続する二里岡期や同時代の二里頭文化との比較を通して、下七垣文化の社会構造の時空間における相対的特徴を明らかにする。

劉莊遺跡の墓地は、墓の空間分布と副葬土器の型式より2つの集団が3時期にわたって形成したことが分かる。集団内には階層差が存在し、特に第2期以降、副葬土器数やその組成も階層を示す要素となり、階層格差が拡大する。しかし、非日常的副葬品は一貫して階層表示機能をもたず、劉莊遺跡では副葬品の「質」ではなく「量」や「組成」で階層差を示したと考えた。さらに、このような格差は集団間にも存在し、東区集団が集落の主導的な地位にあったと想定した。階層上位墓の分布状況を見ても、出自を同じくする東西集団内の家族あるいは世代単位で分散し、このような階層上位者を常に輩出した東区がより優れた社会であったと考えた。ただし、突出した社会階層の不在や階層表示システムの未整備からは成熟した階層化社会を把握できず、その萌芽段階に位置付けられるとした。

さらに下七垣文化に属する孟莊遺跡や南城遺跡の分析から、劉莊遺跡の社会構造が下七垣文化における一般的な社会構造を反映する可能性を指摘した。その後、このような下七垣文化の社会構造は、階層表示という点でより先進的な同時代の二里頭文化から、酒器を中心とする非日常的副葬品の意味や青銅器の製作技術とその価値を主体的に受容し、在地で培った鬲を中心とする副葬習慣に新たな要素を付加していく。そして、その結果として後続する二里岡期以降における殷系文化の葬制が成立していくと考えた。

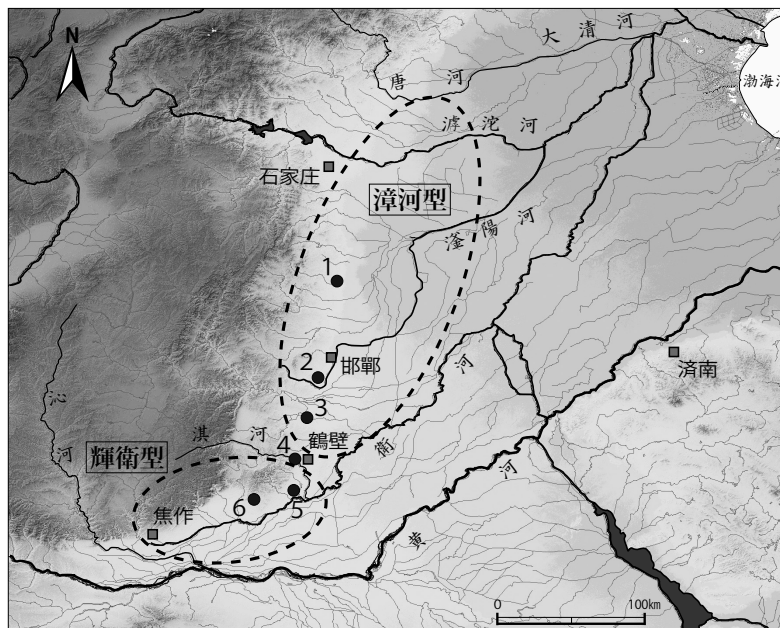
はじめに

かつて、二里頭文化併行期の河北中南部・河南北部にみられる物質文化について、「先商文化」という名称が与えられた。鄒衡により提起されたこの先商文化という概念は、意味的変遷を経ながら「試論夏文化」の中で「成湯滅夏」による殷建国以前に相当するとされた(鄒 1980)。そして、考古学的根拠を挙げながら先商文化を漳河型、輝衛型、南関外型の3類型に区分した。つまり、鄒衡は古文献から定義された殷以前に当たる先商文化という概念の中に、モノから定義する考古学の類型を当てはめたことになる。

鄒衡を批判的に継承した李伯謙は、先商文化を「成湯滅夏」以前の商族、あるいは商族を中心とする集団が創造し、担った文化であると定義し、これを考古学的原則に沿って下七垣文化と命名した(李伯謙 1989)。これについて鄒衡は先商文化の名称としての正当性を主張するが(鄒 2000)、すでに多くの研究者が指摘するように、先商文化自体が古文献に基づく族概念であり、鄒衡がいくら漳河型や輝衛型を明らかな先商文化であると主張しても、考古学的根拠から構

築された文化名称として適切とはいえない。また、近年の二里頭文化の絶対年代における研究の進展と古籍における夏と殷建国以前の諸王の対応関係から、先商文化が龍山文化にまで溯るとされることから(王震中 2010)、先商文化という概念で考古学文化を捉える限界が露呈されている。したがって、本論でも先商文化という呼称は基本的に使用せず、考古学的証拠から定義できる下七垣文化を用いることにする。

多くの研究者が認めるように、土器系統からみれば、この下七垣文化が二里岡期以降の殷系文化へつながることについて疑いの余地はない。『史記』夏本紀には「湯修徳、諸侯皆歸湯、湯遂率兵、以伐夏桀。桀走鳴条、遂放而死。」とあり、夏の最後の王である桀が徳を修めず、湯がこれを討つたとする記載がみられる。このような内容は『史記』殷本紀や『竹書紀年』などでも確認できる。当然、「成湯滅夏」については、殷だけではなく「景亳之会」に代表されるように、多くの族集団が参加したと考えられている(田ほか 1997)。しかし、『史記』夏本紀にみられる「乃召湯而囚之夏台、已而釈之。」との記載からは、湯が桀



※ 地図はカシミール3Dにて作成した
 1：葛家莊遺跡 2：南城遺跡 3：邯鄲遺跡 4：劉莊遺跡 5：宋窯遺跡 6：孟莊遺跡

図1 鄒衡による漳河型および輝衛型の分布範囲と本論で扱う遺跡の分布

の注意を引くほどの勢力をもったと理解でき、その集団はそれ相応の社会構造を有していたと考えることもできる。そして、現状で初期国家と評価されることもある二里頭文化が夏王朝の一部に相当するのであれば¹⁾、それを打倒した殷は一定の発展段階にあったと考えられる。

これは、あくまでも文献から推測した「成湯滅夏」時における社会の一端である。しかし、下七垣文化に後続する二里岡期や殷墟期の高度な技術を要する大量の青銅器、宮殿区や王陵区、製品ごとに分けられた工房区などの明確な空間配置区分、広域から集められた威信財的遺物、甲骨文字の使用などは明らかに高度な社会構造の存在を示唆しており、これらが一朝一夕に成立しえないことから、すでに二里頭文化併行期から一定の発展段階にあったとイメージしがちである。

しかしながら、これまで下七垣文化の社会構造に関する研究は良好な資料に恵まれず、その起源や時期区分、類型の設定などに議論が集中し、等閑視されがちであった。一方、文献史でも『史記』殷本紀の「自契至湯八遷」の地理比定などが注目され、社会構造については詳細な記載が少なく、実証的な研究が行われなかった。したがって、下七垣文化の社会構造研究は、これまでほとんど手付かずの分野であったといわざるを得ない。このような折に刊行されたのが『鶴壁劉莊』

の報告であり、後述するように下七垣文化の社会を復元するうえで良好な墓地資料を提供している（河南省文物局 2012）。

本論ではこの劉莊遺跡の分析を中心に据え、墓を通して下七垣文化の社会構造を明らかにする。特に、初期国家の形成を考えるうえで不可欠な視点である階層構造や集団構造について論じる。また、同時代の二里頭文化や後続する二里岡期の墓の諸要素との比較を通して、下七垣文化社会の時空間における相対的位置付けを明確にし、それらとの相互関係を明らかにする。

1. 劉莊遺跡の概要および下七垣文化におけるその位置付け

劉莊遺跡は図1に示す河南省北部の鶴壁市東郊に位置し、中国の国家プロジェクトである南水北調工程中線の建設に伴い行われた分布調査によって確認された。遺跡自体は、西北から流れる淇河の北岸に位置するため、北から南へ向かい緩く傾斜する地形に立地し、比較的平坦で周囲が開けた状況にある。2005年から行われた発掘調査により、仰韶文化大司空類型および下七垣文化の遺物が出土し、特に東西110m、南北55mの範囲から検出された下七垣文化に属する338基の墓はこれまでに例がなく、ほぼ墓地全体が明らかにされた極めて貴重な墓地遺跡である。墓地を形成した集落については、劉莊遺跡周辺に位置する大賚店、

北河頭、劉莊東南の3遺跡が挙げられている（河南省文物局 2012）。しかし、各遺跡ともに劉莊遺跡からは数百mの距離がある。どの遺跡に居住した人々が劉莊遺跡を形成したのかについては、今後、これらの遺跡の発掘および下七垣文化における集落と墓地の関係を明確に示す例が現れるのを待って判断する必要がある。

墓は基本的に一次葬で長方形竪穴土壙墓である。2012年に刊行された報告書では、これら338基の墓をまず頭位方向で東西両区に分け、さらに西区を墓の分布状況から2区に細分する。つまり、東区、西Ⅰ区、西Ⅱ区の3区に区分する。当然、これだけの墓地が短期間に形成されたとは考えにくい。報告書では遺跡を3時期に区分するとしながらも、その詳細は記述されず、個別の墓の年代が確定できないため、墓地の形成過程は不明である。その最大の要因として、墓地全体で6組の切り合い関係しか確認されず、墓同士の層位関係が把握できない点が挙げられる。遺跡の年代幅については、上限を二里頭文化第2期、下限を二里頭文化第4期の早い段階とし、それぞれ李伯謙による下七垣文化3期編年の1～3期、『中国考古学』夏商巻による4期編年の1～3期に相当するとしている（河南省文物局 2012）。

下七垣文化における劉莊遺跡の位置付けについては、まずその分布域における地理的位置を確認する。下七垣文化は当初、鄒衡により先商文化と命名され、漳河型、輝衛型、南関外型の3類型が設定された（鄒 1980）。その後、李伯謙は南関外型について殷文化とされる二里岡下層段階の祖型になりえないとし、漳河型と輝衛型のみを下七垣文化とした（李伯謙 1989）。現在では、その他に保北型（沈 1991）や岳各莊類型（中国社会科学院考古研究所 2003）、補要類型（北京大学考古文博学院ほか 2011）、葛家莊類型（任ほか 1999）、鹿台崗類型（魏 1999）、杏花村類型（張渭蓮 2008）など、様々な地域に多様な名称で類型が設定されるが、鄒衡により提示され李伯謙により整理された漳河型と輝衛型が下七垣文化の中心にあることは間違いない²⁾。

鄒衡によれば、これらの分布範囲は、図1のように漳河型が河北省の唐河以南、河南省の淇河以北、衛河以西、太行山脈西麓以東であり、輝衛型は淇河以南、黄河以北および沁河下流と衛河上流一帯を含む範囲ということになる。劉莊遺跡は上記したように淇河北岸に位置し、まさに両類型の境界に位置する。ただし、淇河がその下流で衛河上流に合流する点を考慮すれば、一部の研究者がそうするように（胡・王 2012

など）、輝衛型に入れるべきである。しかし、輝衛型の北端に位置し、さらに墓地遺跡という性格上、他遺跡と比較して出土遺物に偏りがあるため、輝衛型の典型例とも判断できない。そもそも李伯謙が指摘するように、漳河型と輝衛型は一部の基本的な特徴が類似し（李伯謙 1989）、葬制なども竪穴土壙墓へ厝を中心に豆や盆を副葬する点で共通する。これらの要素はともに後の二里岡期にも引き継がれることから、やはり両類型の類似性を指摘することができ、これらが二里岡期へとつながることが分かる。したがって、本論で行う分析の過程でも、両類型を中心とする下七垣文化という範囲の中で検討を進めていきたい。

次に、下七垣文化における劉莊遺跡の遺跡規模からみた位置付けを確認する。表1は、下七垣文化に属する主な遺跡規模の一覧である。基本的に報告で下七垣文化の出土遺物が確認でき、遺跡規模が分かる遺跡を掲載している。一部の報告には遺跡規模の記載がないが、それらは中国文物地図集の河南分冊および河北分冊で確認した。大型の遺跡を中心に、大多数が数時期にわたる複合遺跡であり、必ずしも下七垣文化における実際の遺跡規模を示していないが、一つの目安にはなろう。掲載遺跡全体の平均値は、おおよそ80,000㎡ほどとなるが、3時期以上にわたる遺跡を除くと約30,000㎡となる。劉莊遺跡は11,150㎡ほどであり、墓地遺跡という性格やほぼ下七垣文化単独の遺跡である点を考慮すれば、実際に劉莊遺跡を形成した集団の規模は、より平均値に近かったと考えられる。つまり、下七垣文化の中で劉莊遺跡は一般的な中規模の範疇に入る集団が形成した墓地であったと考えてもよからう。

2. 墓地の時期区分と区域区分

(1) 下七垣文化の時期区分に関する研究略史

墓地の具体的な分析に入る前に、まず劉莊遺跡の時期区分を行う必要がある。それに先立ち、下七垣文化全体の時期区分について整理しておく。下七垣文化の時期区分については、これまで多くの見解が提出されている。主なものには、鄒衡の2期区分（鄒 1980）、張翠蓮や李伯謙の3期区分（張翠蓮 1999；李伯謙 1989）、胡保華・王立新や中国社会科学院考古研究所の4期区分³⁾（胡・王 2012；中国社会科学院考古研究所 2003）、沈勇の5期区分（沈 1991）などがある。ただし鄒衡は、その論考の後記において下七垣遺跡第4層が2期区分の第1期よりも遡ることを認めているため、実質的には3期区分と考えるべきである。

張翠蓮や沈勇は、いわゆる下岳各莊文化や保北型を

表1 下七垣文化に属する主な遺跡の規模

遺跡名	時期	面積 (㎡)
安陽市彰鄧遺跡	夏商・戦国・宋	6,000
武安市崔炉遺跡	夏商	6,000
長垣県宜丘遺跡	新石器・夏商	9,000
臨城県南三岐遺跡	夏商	10,000
磁県界段營遺跡	新石器・夏商・西周・戦国	10,000
民権県牛牧崗遺跡	新石器・夏商・東周	12,000
杞県鹿台崗遺跡	新石器・夏商・東周	14,000
邢台市葛家莊遺跡	夏商・西周	20,000
邢台市曹演莊遺跡	商・東周	20,000
内邱県小驛頭遺跡	新石器・夏商	20,000
永年県何莊遺跡	夏商・戦国・漢	30,000
新郷市潞王墳遺跡	夏商	30,000
磁県下七垣遺跡	夏商・西周	30,000
安陽市西高平遺跡	夏商・西周	39,000
任邱市唾叭莊遺跡	新石器・夏商・西周・戦国	60,000
磁県下潘汪遺跡	新石器・夏商・西周・戦国・漢・唐	90,000
容城県上坡遺跡	新石器・夏商	100,000
淇県宋窯遺跡	新石器・夏商・西周・戦国	100,000
臨城県補要村遺跡	新石器・夏商・唐・宋	120,000
鶴壁市大賚店遺跡	新石器・夏商	120,000
新郷市李大召遺跡	新石器・夏商・西周・戦国・漢	200,000
輝県孟莊遺跡	新石器・夏商・西周・東周	300,000
輝県孫村遺跡	夏商・戦国・漢以降	510,000
安陽市西蔣村遺跡	夏商	30,000 以上
鶴壁市劉莊墓地	新石器・夏	11,150

中心に据えた内容であり、下七垣文化の詳細な検討を行っていないことを考えれば、鄒衡と李伯謙の3期区分および胡保華・王立新と中国社会科学院考古研究所の4期区分が検討の対象となる。これら編年案は、いずれも第1期あるいは第1段に下七垣遺跡第4層を中心とする遺物を当てはめる。下七垣遺跡第4層からは鬲の出土がなく、李伯謙や中国社会科学院考古研究所の編年では徐水鞏固莊の鬲をこれに入れる。それに対し、鄒衡は当該期に鬲は存在しないと批判する(鄒2000)。しかし、下七垣文化の特徴を最もよく示す鬲がない段階を同文化と認定するには無理があり、土器様式という点からも首肯できない。筆者としては、龍山文化段階にも鬲が存在したことを考慮すれば、この段階にも鬲は存在するものとする。また、後述するが、鬲は頸部が直立するものから外反するものへと変化する。しかし、第1段に鬲の存在を認めない胡保華・王立新の論考では、鬲が出現する第2段に単頸の鬲を入れる⁴⁾。つまり、下七垣文化の最初期には頸部が長いものと短いものが併存すると想定する。しかし、筆者の分析では、これは形態変化の過渡的段階であり、実際に邯鄲地区における長頸から単頸への変化を明確

に示す研究も発表されている(張曉崢2012)。また、下七垣文化の鬲の起源とされる山西省中部との関係を考えても、下七垣文化最初期には頸部の長い例が存在したとすべきである。

この下七垣文化最初期の鬲の問題以外では、以下のような問題を指摘できる。鄒衡が、現在では二里岡下層前半に位置づけられる二里岡C1H9などを下七垣文化の範疇で捉えてはいるが、これは当時の資料的制約による問題である。また、李伯謙編年も時代的な資料的制約を受けており、鹿台崗遺跡など下七垣文化後期に位置づけられる遺跡の報告前であり、これらが抜けている。ともに4期区分を行う胡・王両氏と中国社会科学院考古研究所は、特にそれぞれの3・4期で遺跡の年代観に差異がみられる。鹿台崗遺跡について、胡・王両氏は第4期に入れるが、中国社会科学院考古研究所は第3期に入れる。逆に、安陽地区の諸遺跡について、胡・王両氏は第3期とする一方、中国社会科学院考古研究所は第4期とする。筆者の見解では、鬲の形態などより胡・王両氏の年代観が妥当と考える。つまり、胡・王両氏の第1期に頸部が直立する鬲を当てはめた編年が、筆者が現状で最も妥当と考える編年案となる。問題は、劉莊遺跡がこれら編年のどの段階に位置づけられ、区分されているかにある。

劉莊遺跡は2007年に正式な簡報が公表された、比較的新しい遺跡である。したがって、上記した編年案の中で、それ以降に発表された胡・王両氏の論考で扱われている。その中では、輝衛型3期区分の第2期、つまり下七垣文化の第3期相当に置かれ、一時期として認識される。しかし、劉莊遺跡の2007年簡報で公表された土器はわずか29点であり、しかも形式的に偏った内容である。一方、2012年刊行の報告書に掲載された土器は358点にのぼり、多様な型式が存在することが明らかとなった。したがって、これらの資料を改めて分析することで、下七垣文化における年代的な位置付けと劉莊遺跡の時期区分について、新たな認識を得ることができると考える。以下で劉莊遺跡の土器の再分析を行い、上記の問題を解決することで、社会構造を分析する基礎を固めておく。

(2) 劉莊遺跡出土土器の分類

劉莊遺跡にみられる土器の中で、最も多いのは138点が出土した鬲である。それに63点の豆と47点の盆が次ぐ。二里岡期をはじめとする殷系の墓からもこれらの副葬品が出土する傾向があり、墓からみれば下七垣文化がまさに殷系文化へとつながることを示唆する。これら十分な出土数がある鬲、豆、盆の3器種に

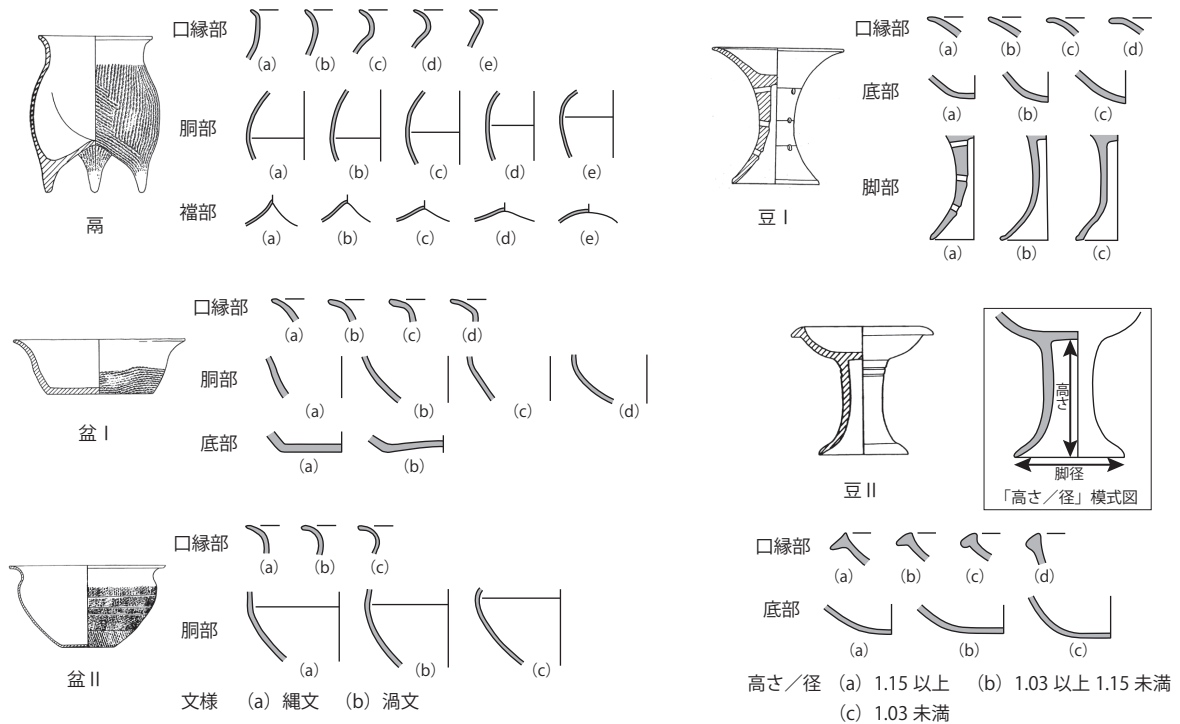


図 2 土器の分類基準

ついて、図 2 をみながら分類基準を説明する。

鬲は 1 形式として扱う。報告書ではいわゆる鼓腹と垂腹の 2 系統とするが、本論では主に頸部に注目し、胴部などは従属的な要素として扱うため、資料数を確保するうえでも 1 形式として理解する。分類属性は、より時間的な変化を示すと考える頸部、胴部、襠部に注目する。頸部はより長く明確に直立する a から次第に短く外反する e に分類する。胴部は最大径が下位にある a から中位に上がる c、さらに上位へと移る e の 5 類に分ける。襠部は「人」字形に深く切れ込む a から少しずつ浅くなる c・d に至り、最終的に弧状の e がみられる。

盆は 5 形式に細分できるが、これも分析に耐えうるサンプルサイズを確保できる盆 I と II のみを対象とする。盆 I は口縁部、胴部、底部から分類を行う。口縁部はやや外湾しながら直線的にのびる a から次第に屈曲が強くなる d の 5 類に分ける。胴部は直線的に立ち上がる a から丸みをもつ d に分類する。底部は平底と凹形に分かれる。盆 II は口縁部、胴部、文様に分ける。口縁部は胴部から直線的に立ち上がり外反する a、一度やや内側に傾いてから外反する b、強く内側に入り込んでから外反する c の 3 類に分類する。胴部は緩く外傾しながらカーブして立ち上がる a から明確な最大径が上位にある c へと至る。文様は、縄文のみのものと渦文をもつものに分ける。

豆は 4 形式ほどに細分することができるが、ここでは十分な資料数が確保できた豆 I と II について分類を行う。豆 I は口縁部、底部、脚部に注目する。口縁部は、胴部からやや外湾しながら直線的に口唇部へと至る a から次第に外湾が強くなりより明確に屈曲する d に分類する。底部は浅く内底部が平坦な a から深く断面弧状を呈する c に分けられる。脚部は穿孔される a、穿孔がなくなる b、裾部がやや膨らむ c に分類できる。豆 II は、口唇部、底部、脚部の高さ/径の数値から分類を行う。口唇部は、断面三角形に近い a から次第に丸みを帯び、やや肥厚するような d に至る。底部は浅く緩くカーブする a、やや屈曲が明確になる b、深く明確に屈曲する c の 3 類に分ける。脚部の高さ/径は 1.15 以上を a、1.03 以上、1.15 未満を b、1.03 未満を c とする。

以上が分類の基準である。次に、各形式内における属性の対応関係を表 2 でチェックすると、ある程度の相関を認めることができるため、本分類案が一定の妥当性を持つことを確認できる。また、相関関係からそれぞれに型式名を付し、鬲を 5 型式、盆 I を 4 型式、盆 II を 4 型式、豆 I を 4 型式、豆 II を 3 型式に細分した。さらに、それぞれを細別形式に区分できる。

本来ならば、これら型式の相対的な時間差を確認するため、一括性や遺構あるいは層位の早晚を確認する必要がある。しかし、劉莊遺跡は基本的にすべての土

表2 各形式の属性対応関係(左)と型式設定(右)

① 鬲

口縁部	胴部					襠部				
	a	b	c	d	e	a	b	c	d	e
a	5	1	1	2		3	2	2	2	
b	2	3	1				3	2	1	
c		7	1	1	1		3	2	5	
d		7	18	34	10		17	40	10	
e		5	10	5			3	9	4	2

口縁部	胴部	襠部	型式
a	a·b	a·b	Aa
	c·d	c·d	Ab
b	a·b	b·c	Ba
	c	d	Bb
c	b·c	b·c·d	Ca
	d·e	c·d	Cb
d	b·c	b·c·d	Da
	d	b·c·d	Db
e	e	c·d	Dc
	b·c	b·c·d	Ea
	d	c·d·e	Eb

② 盆 I

口縁部	胴部				底部	
	a	b	c	d	a	b
a	3	2			4	1
b	3	2	1		6	
c		2	5		5	2
d				3	1	2

口縁部	胴部	底部	型式
a	a	a	Aa
	b	a·b	Ab
b	a	a	Ba
	b·c		Bb
c	b	a	Ca
	c	a·b	Cb
d	d	a·b	D

③ 盆 II

口縁部	胴部			文様	
	a	b	c	a	b
a	2	1		3	
b		3	1	1	3
c			5	5	

口縁部	胴部	文様	型式
a	a·b	a	A
b	b·c	a·b	B
c	c	a	C

④ 豆 I

口縁部	底部			脚部		
	a	b	c	a	b	c
a	6			5		1
b	2	4		1	2	1
c		10	2		4	8
d		7	4		3	6

口縁部	胴部	脚部	型式
a	a	a	A
b	a	a·b	Ba
	b	b·c	Bb
c	b	b·c	Ca
	c		Cb
d	b	b·c	Da
	c		Db

⑤ 豆 II

口縁部	底部			高さ / 径		
	a	b	c	a	b	c
a	1			1		
b	1	6		3	4	
c		4	2		2	3
d			2			

口縁部	胴部	高さ / 径	型式
a	a	a	A
b	a·b	a·b	B
c	b	b·c	Ca
	c	c	Cb
d	c	-	D

器が墓の副葬品であり、一つの墓から複数の型式が分かる土器が出土することは少ない。さらに遺構間の切り合いが 6 例のみしかない。6 例のうち、副葬品をもつ墓同士の切り合いは 22 号墓と 23 号墓、261 号墓と 263 号墓の 2 組しかみられず、しかも同形式をもつ関係にはない。したがって、劉荘遺跡内で各型式の時間的関係を明らかにするのは容易ではないし、土器の類似をつないで無理に同時性を探ると、結果的に認識を誤る可能性もあろう。そこで、本論では同様の土器を出土する下七垣文化の他遺跡を参考に、土器の時期差を確認する。

(3) 他遺跡の層位関係と時期区分に基づく土器の前後関係

これまでの下七垣文化を含む遺跡の報告では、その大部分が断片的な資料であるか層位関係が不明であった。したがって、客観的な視点で時期区分を検証することが難しい状況にあった。しかし、2012 年に刊行された安陽鄆鄧遺跡の報告では、部分的なセクション図や平面図が掲載されており、層位関係を検証することができる。また、邢台葛家莊遺跡も発掘担当者による別論文の中で層位に関する部分的な記載がみられる。さらに宋窯遺跡でも基本的な層位関係が示されたうえで時期が区分される。ここではこれらの遺跡の層位や時期区分に沿って、劉荘遺跡で示した土器型式がどのように出土するのかを確認し、型式の前後関係を把握する。

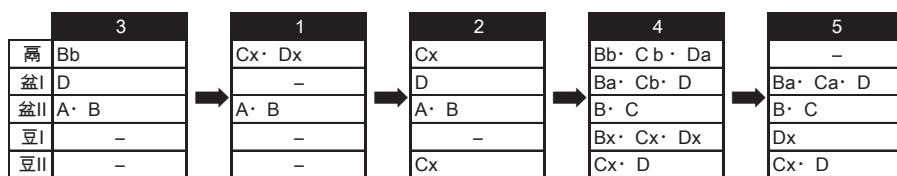
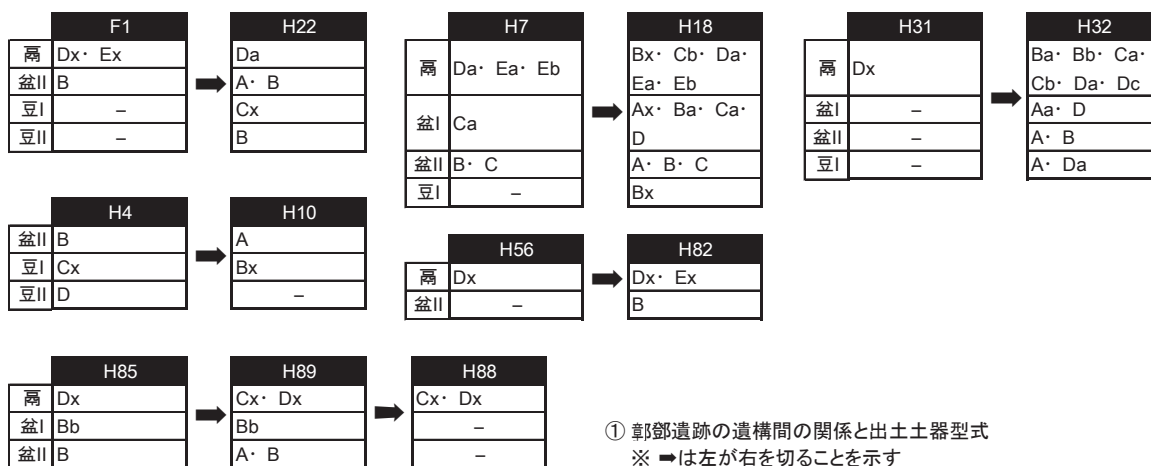
鄆鄧遺跡では、報告書の記載と平面図をみる限り、相当数の遺構が切り合う（河南省文物考古研究所 2012）。報告書に掲載された層位と平面図から判断できる切り合い関係より、遺構あるいは層位における前後関係を確定できる。さらに本論で分類した型式の判断できる 3 器種を出土する例だけで、少なくとも 14 組を抽出できる。その中でも、特に型式間の時間差を判断するのに重要と考えられる組み合わせを図 3-①に示した。鬲は A の出土はないものの、D・E を含む遺構が B-D を含む遺構を切る。H18 については E も出土するが、この灰坑は長径 8 m、深さ 3 m ほどもあり、出土遺物も極めて多い。出土した土器型式の幅も広く、埋没までの時間を長く想定する必要があるため、E が混入した可能性がある。豆 I については B を出土する H10 が C を出土する H 4 に切られ、その相対年代が分かる。盆 I および II については、それぞれ A を出土する灰坑が出土しない灰坑に切られることでその前後関係を知ることができる。報告書では鄆鄧遺跡の年代について詳細な議論を展開しないが、H18

を代表とする第 1 組と H 7 を代表とする第 2 組に分ける。上記したように H18 を典型とすることに若干の疑問を覚えるが、本論の検討からも 2 時期に区分することに対して異論はない。

宋窯遺跡は簡報で詳細な層位関係が示され（北京大学考古系商周組 1996）、その執筆者である張立東により 5 期に区分される（張立東 1996）。しかし、異なるトレンチ間の層位の対応関係について説明がなされないため、胡保華・王立新による論考では深腹罐の形態を根拠に張立東編年の第 3 期に属する T302 第 4-12 層が最も早い段階であるとする（胡・王 2012）。胡・王両氏によれば深腹罐が次第に細長くなり、平底から尖底へと変化するという。確かに T302 第 4-12 層を最初期に置くことでスムーズな型式変化となる。また、本論の分析でも、図 3-②のように T302 第 4-12 層を第 3 期に置くと、鬲の形態に逆転現象が起きる。したがって、胡・王両氏の編年観には一定の妥当性があると考えられる。ただし、張立東編年の第 1 期から D 型式の鬲が出土したり、第 4 期の特に T12 第 4 層から B の鬲が出土するなど、時期区分と鬲の型式の間に若干の矛盾が認められる。胡・王両氏はこれらの矛盾を解消するために王立東編年の 1・2・4 期を一時期にまとめた側面もあったのではなかろうか。いずれにせよ、簡報では 455 点の出土がある鬲の 26 点しか掲載されておらず、発掘時における遺物の層位認定の過程と合わせて、背景に多くの問題が存在するのだろう。本論では、宋窯遺跡の鬲型式と出土時期の関係を参考程度にとどめておきたい。

盆および豆については、簡報の報告に第 4 期の土器が多いことを反映し多様な型式がみられるが、それほど大きな矛盾はみられない。特に盆 II については 1-3 期までが A・B、4・5 期には B・C というように、比較的明確な組成の変化がみられる。これは、張立東が 3 期と 4 期の間に画期を設定した見方と合致する（張立東 1996）。

葛家莊遺跡は、これまで数次にわたる調査が行われ、1996 年、1998 年、1999 年の調査がそれぞれ簡報という形で報告されている（河北省文物局第一期考古発掘領隊培訓班ほか 2001；河北省文物研究所 2000；河北省文物研究所ほか 2005）。その他、別に 1993-1997 年の調査報告およびその分析として、まとまった数の資料が紹介されている（任ほか 1999；郭ほか 1999）。1999 年の時期区分に関する分析の中では、層位関係や切り合いについて詳細な記述はみられないが、それらに基づき 2 期に区分できるとし、簡報でもすべてその 2 期区分に基づき報告され



② 宋窯遺跡の時期別出土土器型式
※ 数字は張立東編年の区分を示し、胡保華・王立新編年に基づき第3期を最早期としている
➡は時間変化を示し、3から5へと時期が下る

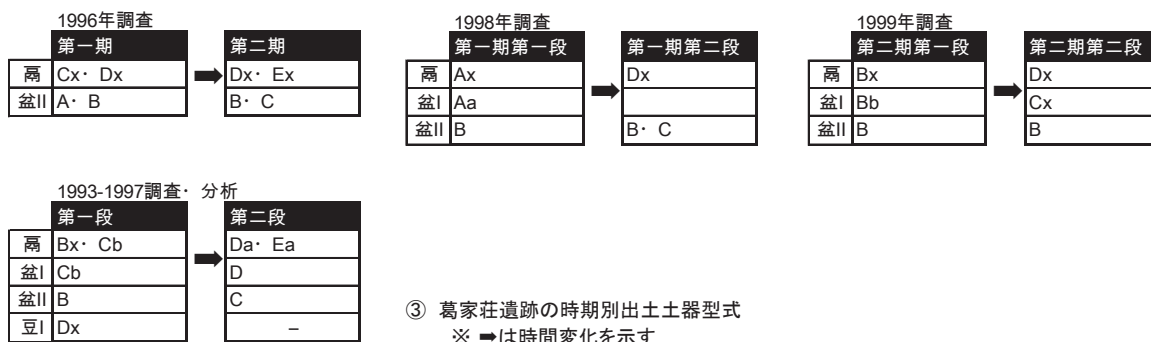


図3 下七垣文化遺跡の出土土器型式

ている。それに各時期から出土した対象器種の分類型式を当てはめると図3-③のようになる。甬についてみると、第一期・段からはA-Dが出土するのに対し、第二期・段からはDとEのみしか出土せず、大きな矛盾はないことが分かる。また一定の出土がある盆IIは、第一期・段にはAとB、第二期・段にはB・Cがあり、漸次的な型式変化を認めることができる。つまり、本論の分析からも諸報告の時期区分の妥当性を支持することができる。

以上より、土器型式から併行関係を確認し、本論で

は表3の通り3遺跡を合わせて前後2期に区分した。宋窯遺跡における甬の問題は残るものの、これを基準として劉莊遺跡の時期区分と区域区分を行っていく。なお、既存編年との対応関係であるが、大まかに胡・王両氏による編年の第2・3期に相当する。ただし、甬についてはAのみを出土する葛家莊遺跡の1998年調査第一段がより早い時期に属する可能性も残すが、簡報から全体の土器相が分からない現状では判断が難しい。

表 3 土器型式からみた時期区分

時期区分	前	後
単位	鄆鄆遺跡：H10・H16・H22・H32・H44・H64・H88・H89 葛家荘遺跡：1996年簡報第一期・1998年簡報第一期第一 段・1999年簡報第二期第一段・1993-1997調査・分析第一段 宋窯遺跡：第1期～第3期	鄆鄆遺跡：F1・H4・H5・H7・H20・H22・H27・H31・H35 ・H53・H54・H55・H56・H61・H70・H82・H85 葛家荘遺跡：1996年簡報第二期・1998年簡報第一期第二段・ 1999年簡報第二期第二段・1993-1997調査・分析第二段 宋窯遺跡：第4期～第5期
鬲	Aa・Bb・Ca・Cb・Da・Dc	Da・Dc・Ea・Eb
盆I	Aa・Bb・Cb・D	Ba・Bb・Ca・Cb・D
盆II	A・B	B・C
豆I	A・Bx・Cx・Da	Cx・Db
豆II	A・B・Cx	B・Cx・D

(4) 劉荘墓地の時期と区域の区分

劉荘遺跡にみられる 338 基の墓は短期間のうちに墓地を形成したとは考えられず、一定の時間をかけて少しずつ墓地を拡大したものと考えべきである。本来ならば、土器型式の組み合わせから時期を区分し、その土器組成の分布を通して区域を区分しなければならない。しかし、一つの墓に 1 点から数点のみしか副葬品をもたない状況では、このような分析にも限界がある。したがって、ここではまず出土数が最も多く明確に時期差を示す鬲の各型式の分布から大まかな墓地の形成過程について考察する。さらに、その他の土器が鬲の分布とどのような関係にあるのかを確認する。

図 4 に示す鬲の分布をみると、大きく① A・B・C を主とするグループ、② C・D を主とするグループ、③ D・E を主とするグループの 3 グループが区域を分けて出土するように見える。それぞれ① A・B・C は報告書の中で東区とされた墓地東部を中心とする一群および西北部の数基、② C・D は報告書西 I 区の東半分および西 II 区の南半分を中心とする一帯、③ D・E は報告書西 I 区の西半分および西 II 区の北東部に相当する。すでに分析した土器型式より、これらは一定の時間差を反映すると考えられる。ただし、鄆鄆遺跡、葛家荘遺跡、宋窯遺跡から分けた 2 期のうちの前期には、鬲型式の A～D が含まれていたが、ここではそのうちの D が含まれないグループが存在する。つまり、2 期区分した時期よりも、さらに早い時期を設定することができ、劉荘遺跡の一部はその段階に属すると考えられる。この時期は研究史でも述べた頸部の長い鬲が卓越する段階であり、下七垣文化でもより早い時期に相当する。この段階については邯鄲地区の研究でもその存在が指摘されており（張曉崢 2012）、また高天麟による劉荘遺跡の最新の論考でも同様の段階を第 1 期と設定する（高 2015）。つまり、鬲から判断すると上記した順に 3 時期にわたって墓地が拡大したと解釈できる。

その次に出土が多い豆 I をみても、図 5 の通りやは

り比較的時期が早い A が鬲 A・B・C と同区域から出土し、矛盾のない状況を呈する。このような分布状況は、墓地東部を中心とする一群がより早い段階に形成された可能性を示唆する。盆 I については、鬲 A・B・C が分布する区域からほとんど出土しない。一方、鬲 C・D が出土する区域からは盆 I A・B、鬲 D・E が分布する区域からは盆 I C・D が多く出土する。つまり、盆を副葬しない鬲 A・B・C の段階から鬲 C・D と盆 I A・B、さらに鬲 D・E と盆 I C・D 副葬する段階へと変化する況を示しており、これも鬲の変化と相関することが分かる。しかし、豆 II は、すべての型式の分布が墓地の東半分に偏る状況を呈し、東西で何らかの副葬習慣の違いがあったことが疑われる。

次に土器分析に加え、墓の平面分布を分析することで、時期と区域の区分に関する証左とした。図 4 の鬲の型式分布をもう一度みると、若干の例外はあるが大部分は一つの墓列の中で一定の型式のまとまりがあることが分かる。これをもとに、一つの墓列の時期を近接した時期と捉え、列同士の並びの切れ目、あるいは並び方の変化から、時期の変化あるいは区域を分ける線引きを行う。並び方の変化とは、具体的にいえば墓列の並びの方向の変化や、ある墓列が別の墓列をよけて並ぶなどの状況を指す。劉荘遺跡の平面図では、これらの変化を明瞭に把握することができ、墓地の拡大過程を捉える際の重要な指標となる。

以上の土器型式の分布に関する検討、墓の平面分布の検討から劉荘遺跡の 3 時期における墓地拡大の様相を図 4 の実線ように想定した。もちろん、明確に線引きを行うことは極めて難しく、いくらかの例外を含むことは覚悟の上だが、社会構造分析を行う際に必要となるのであえてこのような図を作成した。

まず、第 1 期は墓地の最も東側に分布する墓群および最も西北に位置する数基の墓群から成る。そして、第 2 期には東側の墓群が西に向け拡大し、西北の墓群はその周囲、特に東南に向かい分布を拡大する。そして第 3 期には東側の墓群はさらに西に拡大し、西の墓

群は北に向かい広がる。大まかには以上のような分布の変遷を辿るが、第1期から東西二つの墓群があり、それらがそれぞれ時期を経るごとに連続的に拡大することが分かる。つまり、劉莊墓地は二つの集団が中央の空白地帯を挟んで一つの墓地を形成したと考えるべきである。本論では便宜的に、東側の墓群を東区墓群、西側を西区墓群と呼ぶ。日本考古学では、墓地における二分を在来者と婚入者に分けて解釈することもあるが⁵⁾、東西両区ともに男女を含み、さらに小児墓や子供のものと思われる長径150cm以下の墓が両区にみられる。男女を共に含む点では双系出自と理解することもできるが、これまでの研究により中国の新石器時代から次第に父系社会へと編成され、二里頭・殷文化段階には父子・兄弟相続を基礎とする王朝段階へ至る方向と矛盾することになる。また、中国では新石器時代後期の姜寨遺跡などで複数の集団から構成される集落構造が明らかにされており、劉莊遺跡でみられる2集団も在来者と婚入者ではなく、一集落を形成した二つの出自集団と考えた方が妥当であろう。

土器型式と墓の数からみれば、東区の集団がはじめに墓をつくりはじめ、それに遅れて西区の集団も空間を隔てて墓をつくる。第2期にはそれぞれ墓地を拡大するが後出の西区の集団が数を増やす。そして、第3期には東区が西へ継続して拡大する一方、西区の集団は墓が東区集団と交錯しないよう空間を隔てて北へと拡大する。これだけ整然とした配列の墓地を形成する人々であれば、集団ごとに明確な墓域を構成しても当然であろう。また、すでに言及したように豆Ⅱの大部分は東側の墓群からしか出土しないが、これは墓群を形成した集団の副葬習慣における差異を示している可能性が高い。それぞれの集団が異なる出自に由来するのであれば、その表現の差異と考えることもできよう。

墓の長軸方向は、第1期では東西軸が主要であったが、第2期になると南北軸が増加し、第3期には一部に不規則な東西軸がみられる以外、すべて南北軸となる。一般に頭位の差は集団差を示すことが多いとされるが、3か所で見られる東西軸と南北軸の墓の切り合いは、すべて前者が後者に切られる関係にあり、土器型式による墓の変遷とも矛盾しない。また、墓の並びの変化をみても、すべて東西軸の墓をよけて南北軸の墓が列を形成しており、本論の認識と合致する。したがって、劉莊墓地では基本的に第2期を画期として墓の軸方向が東西から南北へ変化したと考えられる。

劉莊遺跡に関する最新の研究として、高天麟の分析がある。その中では副葬土器の詳細な分類とその組成の分布から、墓地が東から西へ向かい形成されたとす

る(高2015)。本論の東区のみをみればそれに異論はない。しかし、西区ではいくらかの早い段階の土器が出土する点、また東区の西側には鬲Eなどの新しい型式が出土する一方、その西の空白地帯を挟んで隣接する西区東側には鬲Eの出土がなく、東から西への拡大という変化がみられない点など、本論の認識からでは首肯できない点が多々みられる。特に中央にみられる墓をつくらぬ空白地帯の解釈もなされていない。高による分析結果は、墓地が一集団のみから形成されたという前提で分析が行われたことに起因するのではなかろうか。

このような2集団から構成される構造は、宮本一夫により新石器時代後期仰韶文化の姜寨遺跡前期の集落分析から示されたことがある(宮本2005)。その中ではそれぞれの集団を外婚単位としての半族と解釈し、さらに分族へ分けられるとする。劉莊遺跡の墓地が一集落に付随し、さらに成員がすべて葬られているのであれば、本論で抽出した2集団もあるいは相互補完的に社会を二分する関係にあった可能性があるろう。そうすると、これら2集団は社会を維持するうえでうまくバランスをとりうる比較的平等な関係にあった出自集団と理解することもできる。

3. 墓の諸要素からみた社会階層

ここで、すでに提示した墓地形成に至る3時期とそれを担った2集団を基準に、劉莊遺跡の階層構造を中心とする社会について明らかにする。墓から社会階層の有無や内容を判断する方法については、すでに倉林眞砂斗や渡辺芳郎により概念整理がなされている(倉林1988; 渡辺1992)。特に渡辺は墓地構成要素を表現・非表現、階層・非階層の諸要素に分け、その対応関係から社会階層を明らかにする際に有効な要素を抽出している。この分類は極めて有効性が高く、本論でもこれに則り、劉莊遺跡でも適応できる墓の規模、施設、副葬品に注目して分析を行う。その際、諸要素間の相関関係を検討する必要があるが、その軸に規模を据える。墓壙の規模は直接的に労働投下量を反映するため、被葬者の社会的地位と対応する関係にあるとされる(宮本2006)。劉莊遺跡の墓の規模を比較すると一定の差異が認められ、大型が少なく小型が多い傾向にある。つまり、その背景に被葬者の社会的地位の差異を想定することができる。これについても他の要素との相関をみながら明らかにしていく。

(1) 副葬土器点数

まず規模と土器を主とする副葬品の点数について、

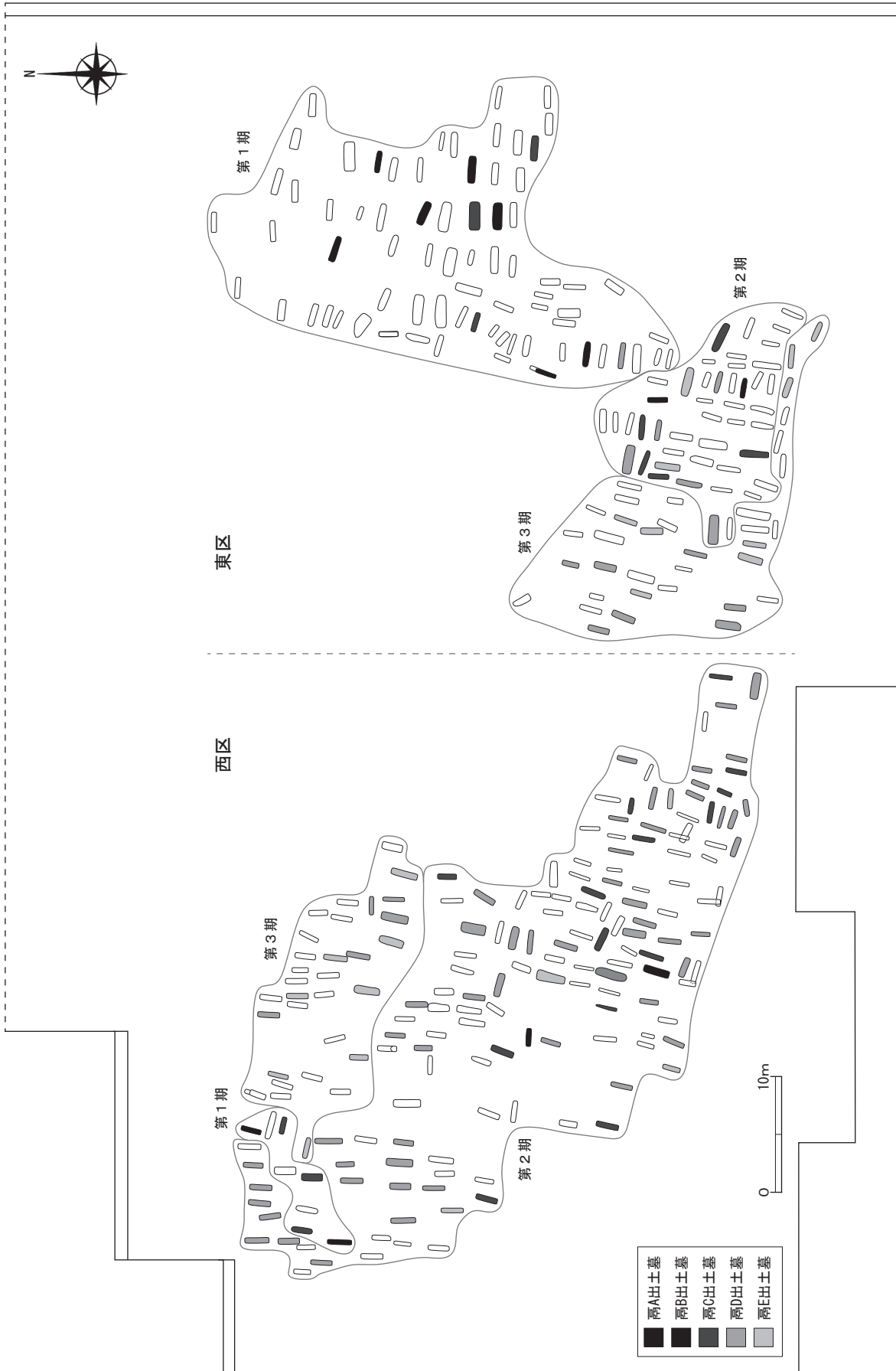


図4 冨の分布

その関係を検討する。図6をみると、第1期では西区にはそれほど多くの墓がみられないものの、東区には長軸2.5mを超える墓から1.5mに満たない墓まで規模における一定の幅が存在することが分かる。しかし、副葬土器点数をみると、最も多い4点の墓はすべて1.8-2mの範囲に収まる。また、副葬土器をもたないあるいは1点のみの墓は大型墓を含む全体に分布する。このような傾向は、西区でもほぼ同様である。

第2期になると東西両区で多くの墓がみられ、ともに一定の規模の幅が看取できるようになる。東区では長径2.5m前後の墓は半数以上が3点以上の土器を副葬する。一方、それ以下の墓は大部分が副葬土器をもたないか1点のみである。同じように西区でも、長軸2.2mを超えるような墓には3点以上の土器が副葬されるが、それ以下の墓は1点以下の副葬が一般である。

第3期は劉莊遺跡の最終段階であり、墓の基数は減少する。しかし、全体的な傾向としては第2期と同様であり、大型の墓であるほど副葬土器の点数が多い状況にある。

以上より、劉莊遺跡における墓の規模と副葬土器点数の間に明確な相関を認めることができる。したがって、その背景には被葬者の社会的地位の差異が存在する可能性が高い。ただし、第1期では両要素間に相関関係がなく、副葬土器を通した階層表示は第2期以降に成立したと考えるべきである。

(2) 規模と葬具

次に規模と葬具の関係を見る。一般に、葬具とは葬儀に使用する道具全般を指すが、ここでは埋葬施設としての棺について論じる。葬具をもたない例を含めると、劉莊遺跡で出土する葬具には図7のように大きく3種類がある。葬具をもたない例以外では、まず報告書で簡化石棺とされるものがある。一般の石棺と異なり、簡化石棺は板状の石を周囲に立て、棺を模したものである。大部分は被葬者の頭側か足側に数点の板石を立てるのみだが、145号墓だけは四周に板石を巡らすため、報告書では石棺とする。しかし、構造的には簡化石棺と同様であり、底部もなく、突出した要素もみられないことから、ここでは簡化石棺として扱う。もう一つの葬具は、木棺である。その大部分はすでに腐食しており、その痕跡しか残さない。これら葬具をもつ墓は全体の8%ほどであり、社会の中で限定された被葬者しか用いることができなかつたはずである。

図8の第1期をみると、葬具は東区のみみられ、西区からは確認できない。東区では、長軸2.4m以上

の墓からは木棺、2m以上2.4m未満の墓からは簡化石棺と、葬具と規模の間に明らかな対応関係がある。この点だけをみれば、葬具の中にも上位の木棺と下位の簡化石棺という価値認識が存在した可能性がある。また、葬具をもたない墓にも大型の例はあるが、大局的にみれば葬具をもつ墓は大きく、もたない墓は小さいといえよう。

第2期には、東西両区で葬具がみられるようになる。葬具をもつ墓は、ともに大部分が大型の墓となっている。さらに、葬具をもたない墓ともつ墓の規模の差が、第1期に比べてより鮮明となる。また、東区では木棺のみが出土する一方、西区では簡化石棺のみしかみられない。第1期にみられる木棺と簡化石棺の関係から考えると、東区は西区と比べてより上位にあったと判断できるが、これは他の要素の在り方と合わせて後述する。

第3期になると、西区では再び葬具がみられなくなる。一方、東区では相変わらず大型の墓に葬具がみられ、やはり葬具をもたない墓との間に明確な規模の差が存在する。ただし、木棺だけではなく簡化石棺も1基のみ確認できる。

以上の分析より、墓の規模と葬具の間には明らかな相関関係があると分かる。また、副葬土器点数とは異なり、第1期から有機的な関係がみられることから、墓地形成当初から階層表示のための要素として機能したと考えられる。特に葬具をもつ墓ともたない墓の規模における差異が、次第に鮮明になる傾向にある。また、第1期と第3期の状況より、木棺の使用は簡化石棺よりも社会的上位に限定された可能性を指摘できる。

(3) 規模と構造

墓の構造は、一般の長方形竪穴土壙墓を除き、二層台をもつ例が全体の4.4%にみられる。二層台はさらに生土と熟土に分けられる。前者は墓壙を二段に分けて掘るもの、後者は長方形の墓壙を掘ったのちに周囲に土を積んで段をつくるものとなる。これらと規模の関係を図9のようにまとめると、第1期には東区で長軸2.5m前後の大型墓に熟土二層台が確認できる。しかし、それらと同規模の墓には、二層台をもたない例も散見される。一方、西区からは一般の竪穴土壙墓しか検出されない。

第2期には、東西両区で二層台をもつ墓が確認できる。東区ではやはり長軸2.5m前後の墓に生土・熟土二層台がつけられる。同規模の墓で二層台をもたない例は2基のみであり、規模と二層台の相関性が高まる

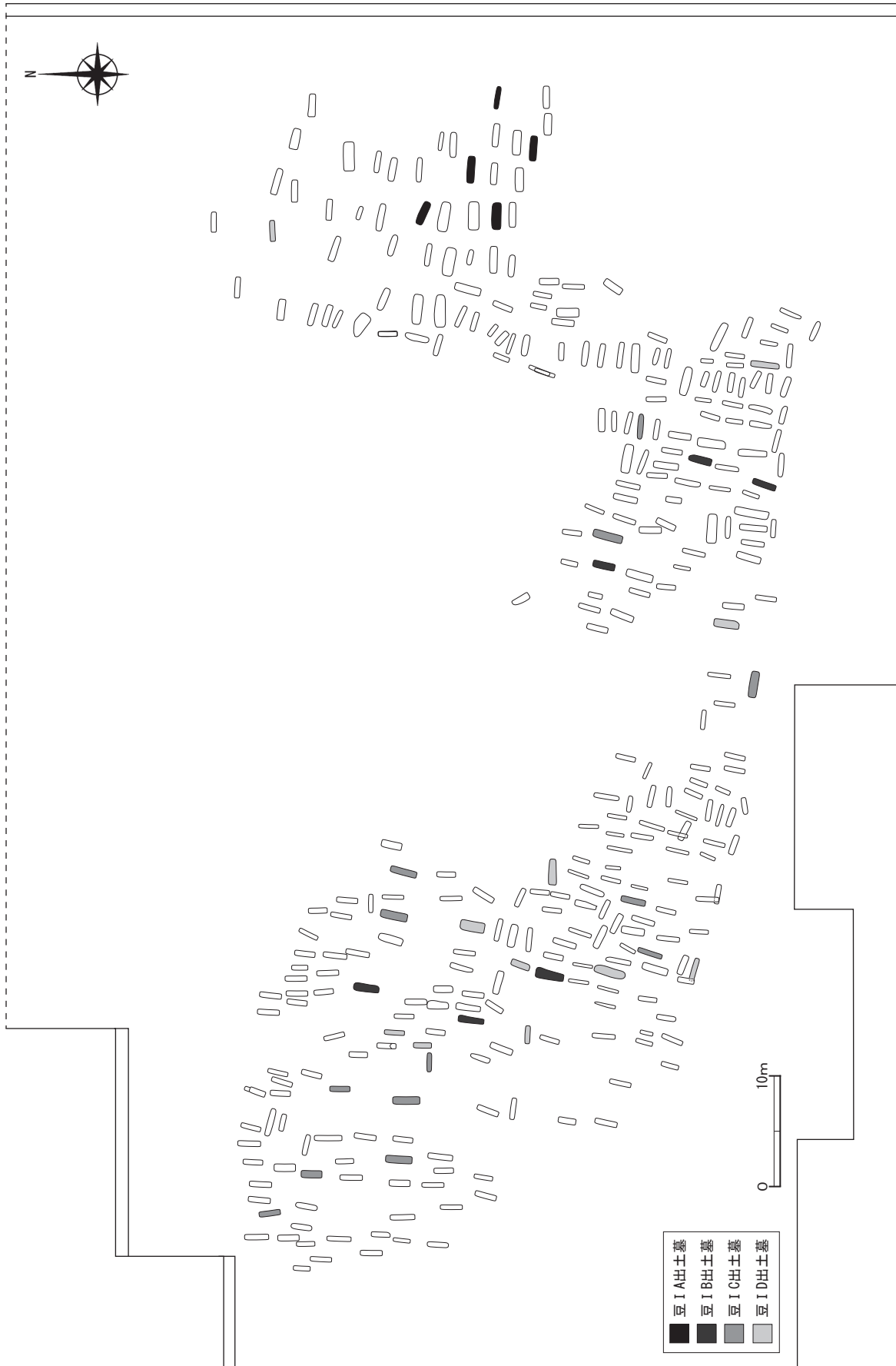


図5 豆 I の分布

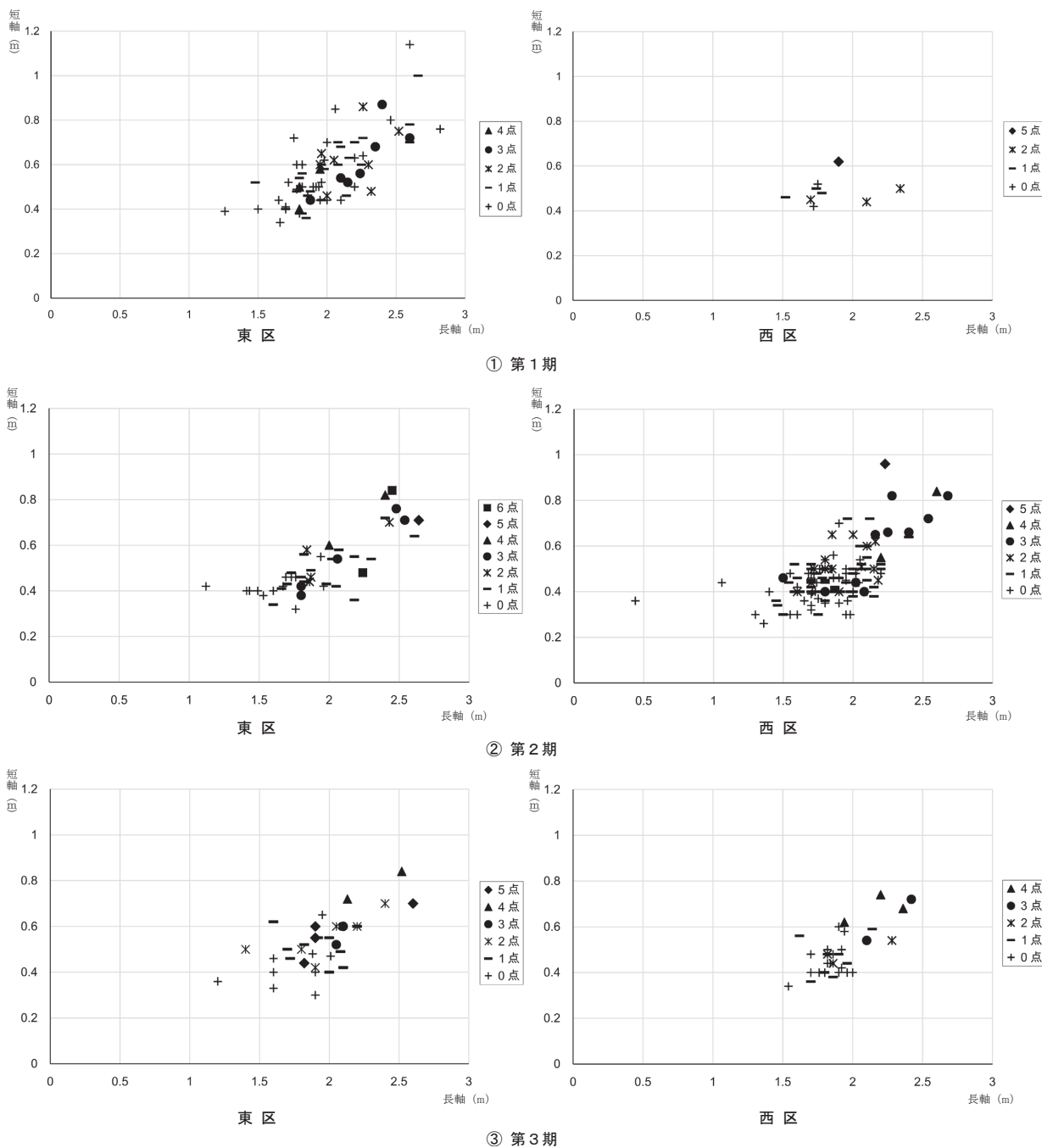


図6 規模と副葬土器点数

傾向にある。西区でも墓壇面積が比較的大きい墓に二層台がつくられる。ただし、大型でも二層台をもたない墓も一定数がみられ、東区とはやや異なる傾向にある。

第3期には再び西区で二層台がみられなくなる。東区では第2期と同様、相対的に大型の墓に熟土二層台が設けられる。また、大型墓の中には1例しか二層台をもたない墓がみられず、規模と構造が極めて高い相関関係にある。

全体としては、全時期を通じて規模と構造の間に有機的な関係が認められる。生土・熟土を問わず二層台は相対的に大型の墓に設けられる。また、第2期以降、東区を中心に大型墓が二層台をもつ墓で占められるようになり、他の墓との間に明確な開きが生じる。後続する殷代では、階層上位の墓に二層台が設けられる点を考慮すれば、劉莊遺跡でも階層化が次第に進行したと解釈することもできよう。

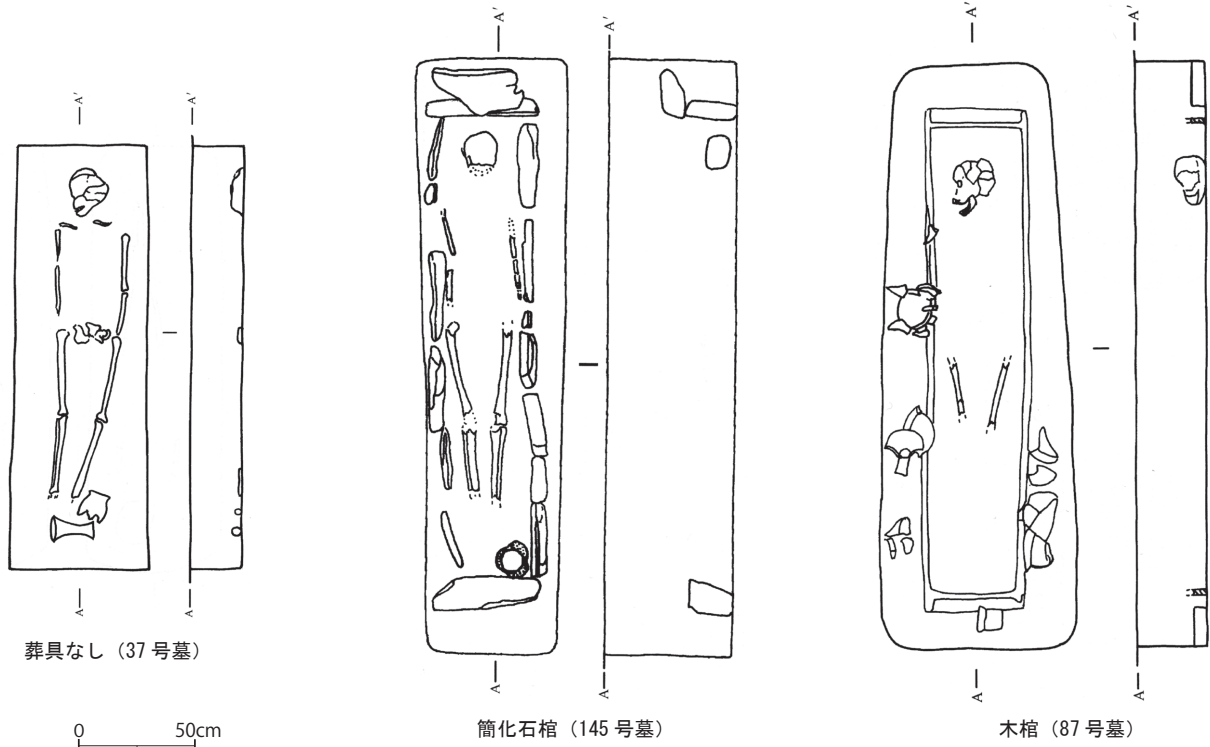


図7 葬具の種類

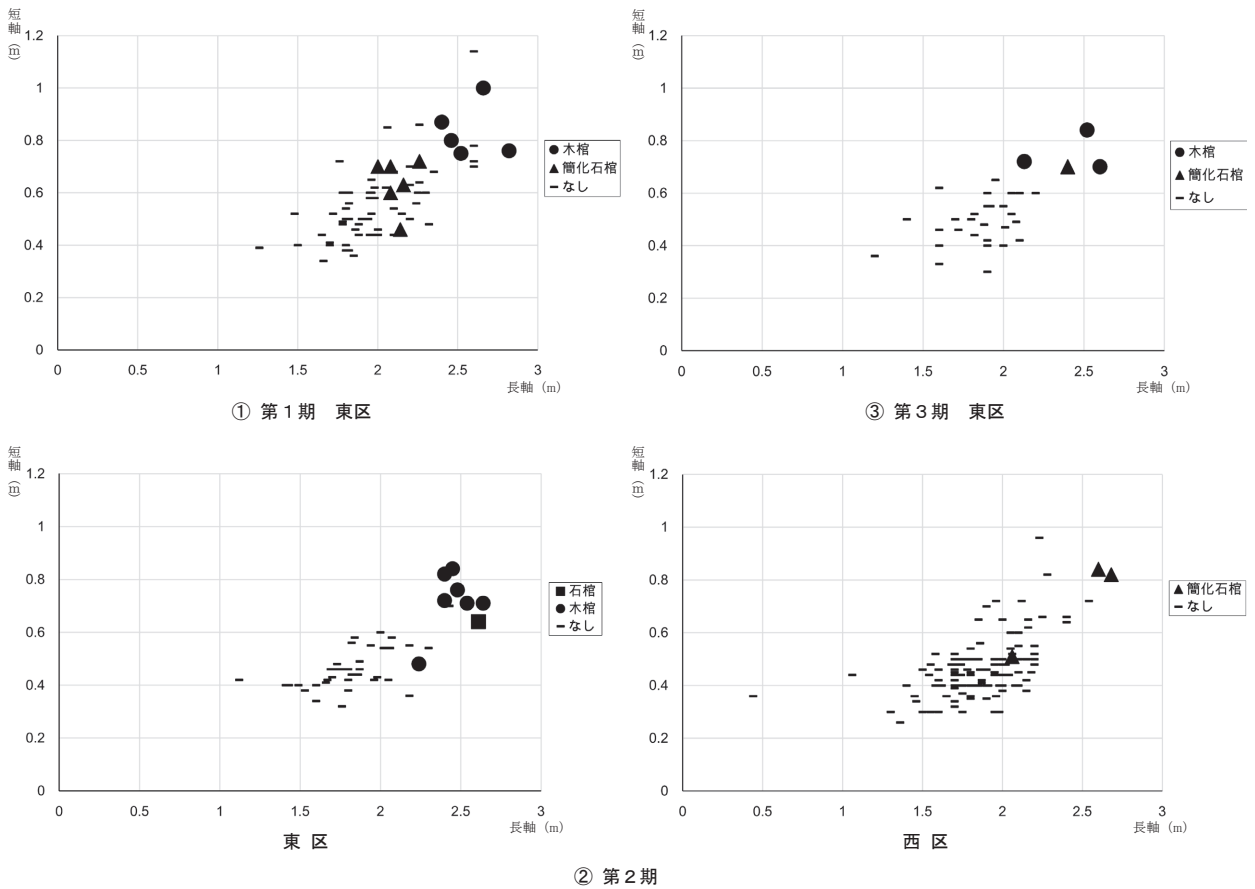


図8 規模と葬具

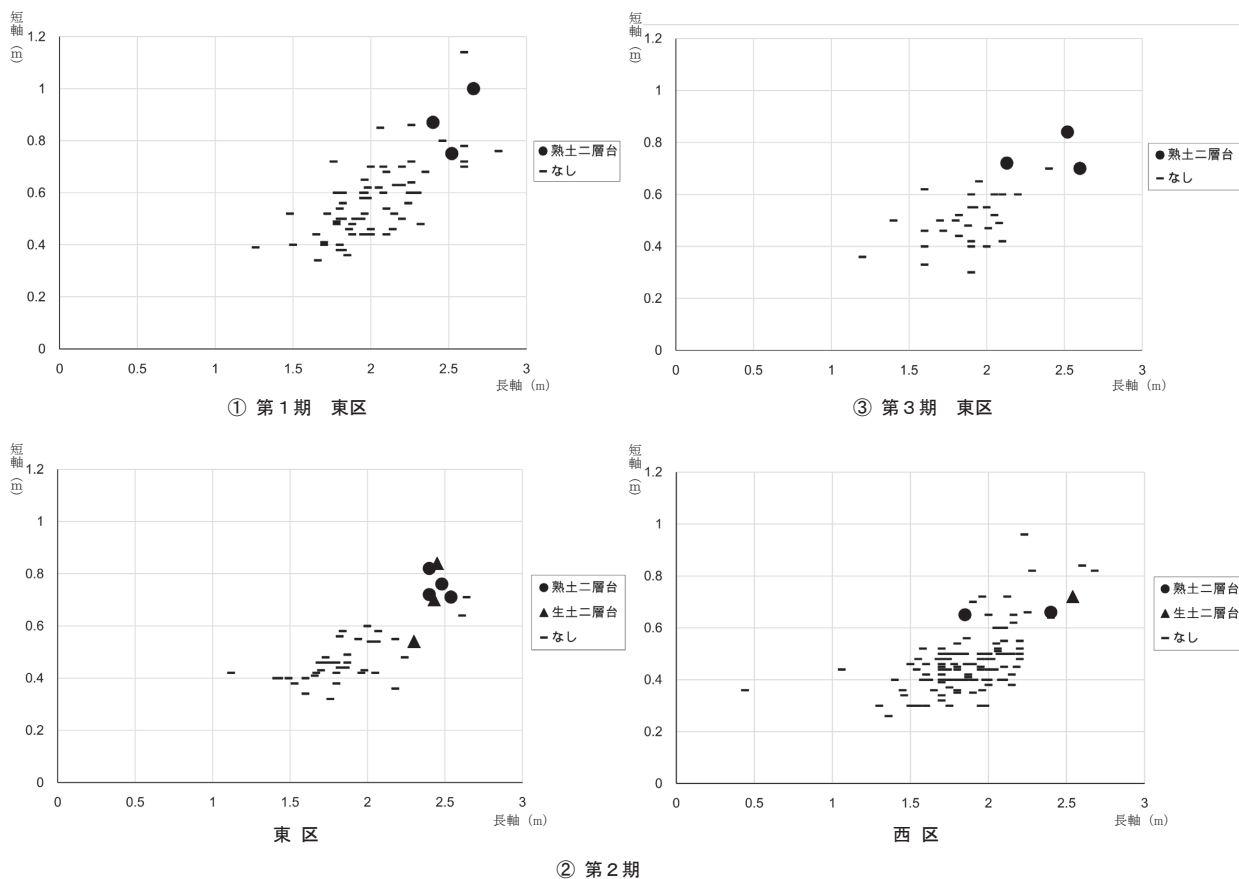


図9 規模と構造

(4) 規模と非日常的副葬品

劉莊遺跡から出土する副葬品は、大部分が下七垣文化の生活址からも出土する土器である⁶⁾。しかし、同時期の二里头文化で酒器とされる鬻、爵、角などの土器も出土する。これらは階層化が進行した二里头社会の身分秩序を維持する道具として用いられた礼器であり、日常的に使用する鬲、豆、盆などとは異なる性質をもつ。当然、二里头文化の分布圏外にある劉莊遺跡では日常的なコンテキストの中で使用された可能性も残るが、出土数が合計しても5点のみであることから、その可能性は否定されよう。したがって、これら二里头系の酒器は非日常的副葬品とみなすことができる。

二里头系酒器以外には、トルコ石製あるいは玉製の管玉状装飾、器面がよく磨かれ波状の鈍い刃部をもつ石鉞なども非日常的副葬品に入れることができる。また、ブタをはじめとした獣骨も一定数が出土する。ブタは下顎骨を中心に、新石器時代から次第に財産や権力の象徴として墓に副葬されるようになる(岡村2005)。したがって、これも同類としよう。本論で非日常的副葬品と捉えた主な遺物は、図10に示して

おく。

これらの非日常的副葬品が規模とどのような対応関係にあるのかを示したのが図11である。第1期には、東区のみから石鉞、トルコ石製品、ブタ骨が出土する。全体としては出土が大型の墓に偏らず、長軸2m前後の中型墓からも確認されている。

第2期になると、東西両区で出土するようになる。東区では大型の159号墓から鬻と角が出土する。一方、中型の208号墓には玉製装飾がみられる。西区では、大型の墓における非日常的副葬品の出土がみられず、すべて中・小型墓からの出土となっている。特に二里头系酒器である鬻と爵が中型の262号墓から出土する点は注目に値する。

第3期には、他の要素が一貫して出現してきた東区で出土が確認できなくなる。一方、西区からは鬻、獣骨、トルコ石製品が出土する。しかし、いずれも大型の墓には副葬されず、すべて中型から小型の墓にみられる。

第1期から第3期までの非日常的副葬品の出土を確認したが、これまでみた要素と異なる傾向を示す。つまり規模との相関がほとんど認められないのであ

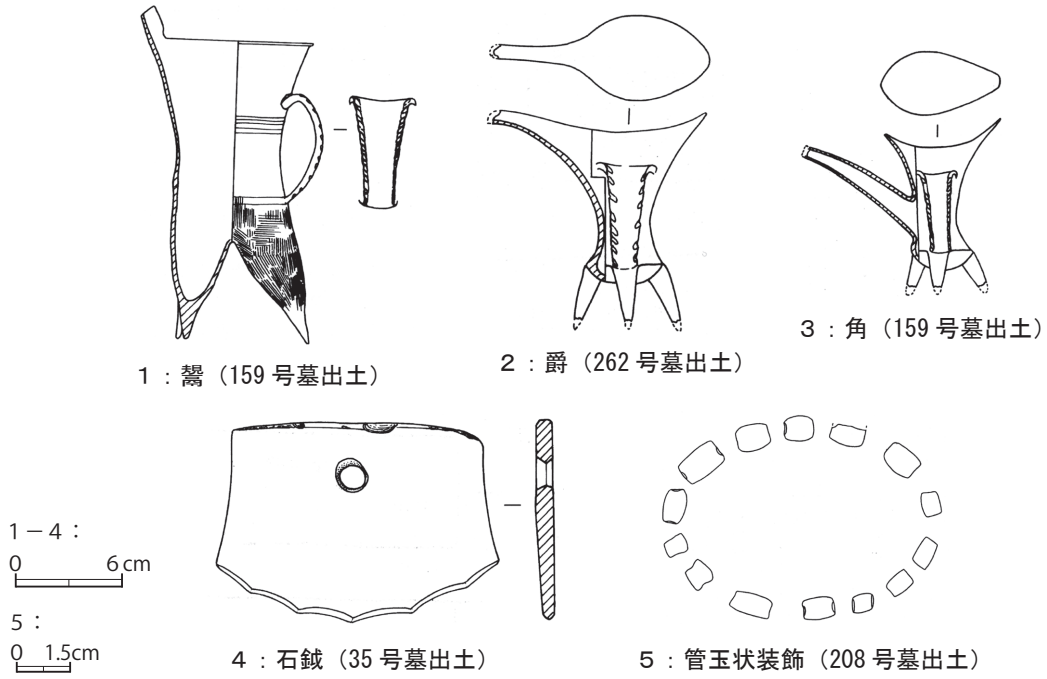


図 10 非日常的副葬品の種類

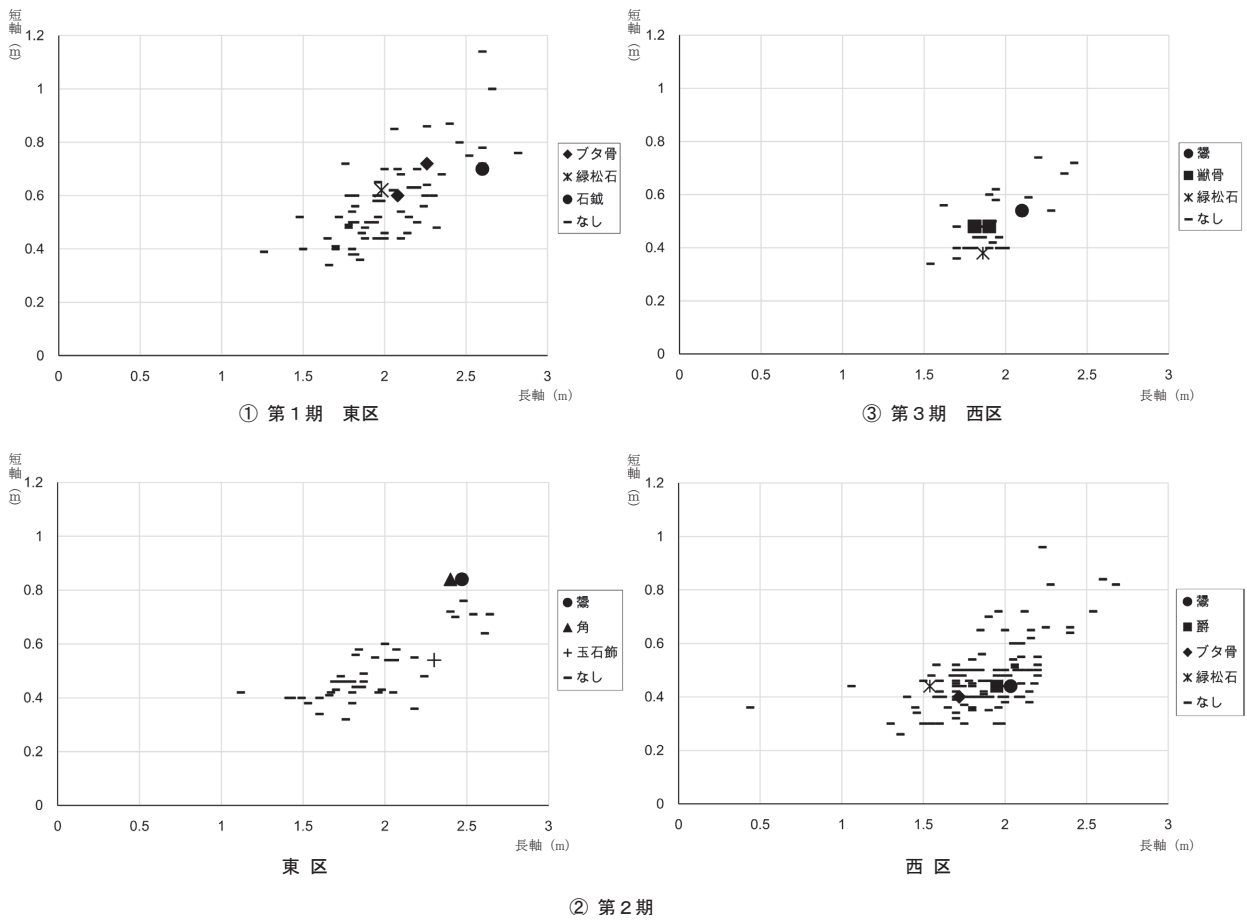


図 11 規模と非日常的副葬品

る。二里头系酒器は中型から大型墓、ブタ・獣骨およびトルコ石製・玉製装飾は主に中型から小型墓より出土し、全体として幅広い範囲に出土が分散する状況を呈す。他要素とは有機的な関係にあった墓の規模と相関しないということは、これら非日常的副葬品が劉莊遺跡の社会において一貫して社会階層を表象する機能を有さなかったことを意味する。

(5) 小結

ここまでの分析により、劉莊遺跡における墓の規模と副葬土器点数、葬具、構造の間に、明らかな相関があることが分かった。表4では墓壙面積が1.5㎡以上の特に大型の墓における、各要素の対応関係を示している。これをみると、規模以外の要素間にも一定の相関性があることが分かる。つまり、劉莊遺跡にはその集団内に一定の規範に基づく階層格差が存在したことになる。ただし、第1期では副葬土器点数が相関せず、葬具や構造でもそれらをもたない墓との境界が曖昧である。しかし、第2期以降には副葬土器点数も規模と相関し、各要素を備える大型墓とそれ以外の中・小型墓の差異が鮮明になる。副葬品の内容からもこのような傾向を認められる。第1期には鬲、豆、盆、罐類などが比較的ランダムに出土するが、第2期以降の大型墓には、副葬品組成が鬲・豆・盆あるいは圈足盤という煮沸器と供膳器のセットがみられるようになり、副葬品の内容でも階層格差を示すようになったと考えられる。一方、中型から小型の墓には、鬲を軸としてそれに盆か豆という供膳器がセットになる。つまり、劉莊遺跡の社会では副葬品として鬲が基本であり、副葬品を2・3点もつ墓はそれに盆か豆を加え、上位墓はこれらすべてを有するという格差が存在したのである。大局的にみれば、副葬品をもたない墓、鬲と豆あるいは盆をもつ墓、鬲、豆、盆をすべて副葬する墓という3段階に分けられる可能性がある。これに加え、大型墓にはさらに葬具や二層台などが伴うのである。このような第1期から第2期にかけての変化は、劉莊遺跡の集団内における階層化が進み、さらに社会階層の表示方法がより整備されたことを意味しよう。

また、葬具には木棺と簡化石棺の間に規模との対応関係の差異が存在した。これは劉莊遺跡において、葬具によるより詳細な階層表示方法が存在した可能性を意味する。木棺が上位でより簡易な構造の簡化石棺がそれに次ぎ、その下に一般の竪穴土壙墓が並ぶ状況は、投下労働量という観点からも首肯できる。

このように次第に階層化が進み、それに伴い階層表示方法も整備される一方で、非日常的副葬品はその中

に組み込まれることはなかった。同時期の二里头文化および新石器時代に溯る大汶口文化や山東龍山文化では、すでに階層と副葬品組成の間に一定の規範が存在する(宮本2005;李志鵬2008)。特に階層上位者には青銅礼器や精製土器など非日常的な副葬品が埋葬される。下七垣文化に後続する二里岡期でも同様の傾向がみられる(郜2011)。このように考えると劉莊遺跡は非常に特殊な状況を呈しており、副葬品についてはその「質」ではなく日常土器の「数」とその「組成」だけで階層差を表現したといえる。この点からみれば、劉莊遺跡は必ずしも高度に階層化が進んだ社会ではなかったことになる。

最後に階層上位墓と性差および年齢についてみると、必ずしも男性で占められる傾向にはなく、一定の割合で女性もみられる。山東龍山文化や陶寺文化などの例より、龍山文化期を中心に男性優位な社会へと移行するという指摘がみられるが、それよりも遅れる下七垣文化の劉莊遺跡ではそのような傾向を見出すことができない。また、年齢についても大部分が成人であり、現状では老人や子供への厚葬も確認できない。

4. 墓地における集団間関係

ここまで劉莊遺跡を形成した集団内に、個人レベルの階層格差が存在したことを指摘した。それを踏まえ、すでに抽出した東西2集団がいかなる関係にあったのかについて、再び各要素の比較を通して検討を行い、遺跡内における階層差の在り方をより明確にしたい。

(1) 墓壙面積

まず、両区域に属する墓の規模について比較を行う。図12は墓壙面積を時期別に示している。これをみると、東区第1期は中央値が1.09㎡、最大値が2.96㎡と、全時期の両区の中で最大である。一方、同時期の西区は一見して規模が小さいことが分かる。第2期には、中央値が東区0.83㎡、西区0.81と拮抗してはいるが、全体の割合としてはやはり東区の方が大型墓の比率が高いということになる。第3期でも比較的明確に、東区の方が西区よりも墓の規模が大きいことが分かる。

つまり、規模については全時期を通して、東区が西区よりも優位な状況にあったといえる。

(2) 副葬土器数

図13に示すように、第1期の東区は一定の墓数があるにもかかわらず、最大でも4点を出土する墓しか

表 4 大型墓における各要素の対応関係

時期	区域	墓番号	性別	年齢	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (m ²)	葬具	構造	副葬土器 点数	副葬土器内容
1	東	3	女	35-40	2.6	1.14	2.96			0	
	東	172	男	25-30	2.66	1	2.66	木棺	熟土二層台	1	甗
	東	217		未成年	2.82	0.76	2.14	木棺		0	
	東	195	女	成年	2.4	0.87	2.09	木棺	熟土二層台	3	甗・盆 2
	東	211	男	25-30	2.6	0.78	2.03			1	夾砂罐
	東	212			2.46	0.8	1.97	木棺		0	
	東	95	男	40	2.26	0.86	1.94			2	甗・豆
	東	185		30	2.52	0.75	1.89	木棺	熟土二層台	2	豆・単耳罐
	東	227	男	40-45	2.6	0.72	1.87			3	豆・盆・甗
	東	35			2.6	0.7	1.82			1	夾砂罐
	東	152		25-30	2.06	0.85	1.75			0	
	東	14	男		2.26	0.72	1.63	簡化石棺		1	単耳罐
	東	39		25	2.35	0.68	1.60			3	甗・豆 2
	東	51	女	20-25	2.2	0.7	1.54			1	夾砂罐
2	西	20			2.68	0.82	2.20	簡化石棺		3	甗・豆・盆
	西	21		25-30	2.6	0.84	2.18	簡化石棺		4	甗・豆・盆・圈足盤
	西	96		32	2.23	0.96	2.14			5	甗・豆 2・盆 2
	東	159		25	2.45	0.84	2.06	木棺	生土二層台	6	甗・豆 2・泥質罐・鬲・角
	東	218	女	40-45	2.4	0.82	1.97	木棺	熟土二層台	4	甗・豆・圈足盤・鼎
	東	193	男	40-45	2.48	0.76	1.88	木棺	熟土二層台	3	豆・単耳罐・簋
	東	236	女	40-45	2.64	0.71	1.87	木棺		5	甗・豆・盆・圈足盤・鼎
	西	93		41	2.28	0.82	1.87			3	豆・鼎・瓮
	西	242		25-30	2.54	0.72	1.83		生土二層台	3	甗・豆・圈足盤
	東	127		30-35	2.54	0.71	1.80	木棺	熟土二層台	3	甗・豆・盆
	東	234		30-35	2.4	0.72	1.73	木棺	熟土二層台	1	甗
	東	161		18-20	2.43	0.7	1.70		生土二層台	2	夾砂罐・簋
	東	145	男	40	2.61	0.64	1.67	石棺		1	甗
	西	278			2.4	0.66	1.58		熟土二層台	3	甗・豆・圈足盤
西	107		30-35	2.4	0.64	1.54			1	甗	
西	9			2.12	0.72	1.53			1	甗	
3	東	87	女	40	2.52	0.84	2.12	木棺	熟土二層台	4	甗・豆・盆・鼎
	東	99			2.6	0.7	1.82	木棺	熟土二層台	5	豆 2・盆・圈足盤・夾砂罐
	西	254	男	35	2.42	0.72	1.74			3	甗・豆・盆
	東	73	男	30	2.4	0.7	1.68	簡化石棺		2	豆・夾砂罐
	西	46		30-35	2.2	0.74	1.63			4	甗・盆 2・鼎
	西	126			2.36	0.68	1.60			4	甗・豆・盆 2
	東	176		25-30	2.13	0.72	1.53	木棺	熟土二層台	4	甗・豆・盆・圈足盤

みられない。また、0-2点しか土器を副葬しない例が全体の80%近くを占める。一方、西区は墓の検出が少なく単純な比較はできないが、最大で5点の土器を副葬する墓がみついている。副葬土器数の平均値で東西両区域を比較すると、東区の1点に対して西区は1.56点となり、西区の副葬土器数の方が多くなる。第2期になると、両区域の格差が明らかになる。東区では3点以上の土器をもつ墓が全体の20%以上を占めるようになる一方、西区では10%に満たない数しか確認されていない。さらに第3期に至ると、やはり東区では3点以上の副葬土器を出土する墓が20%以

上を占める。しかし、西区では第2期に比してやや数を増やすものの、東区よりも少ない。

第1期については比較自体が困難ではあるが、西区の土器が多く、これはすでに分析したように副葬土器数が階層差を示さなかったことと関連する可能性がある。一方、第2期と第3期では常に東区に多くの土器を副葬する墓が位置している。つまり、副葬土器点数からも東区の優位を証明することができる。

(3) 葬具

表5をみれば分かるように、葬具の大多数は東区か

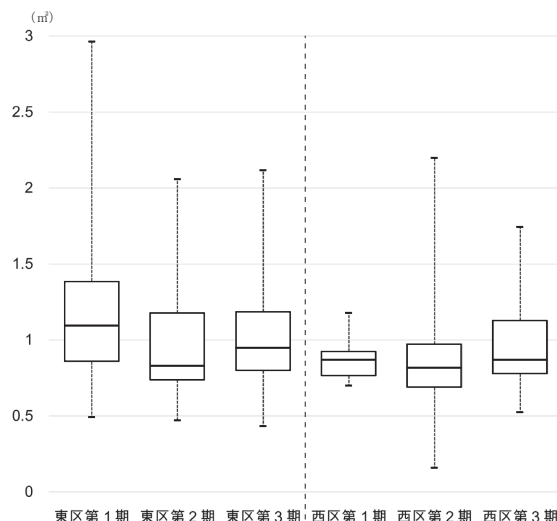


図 12 墓墳面積の比較

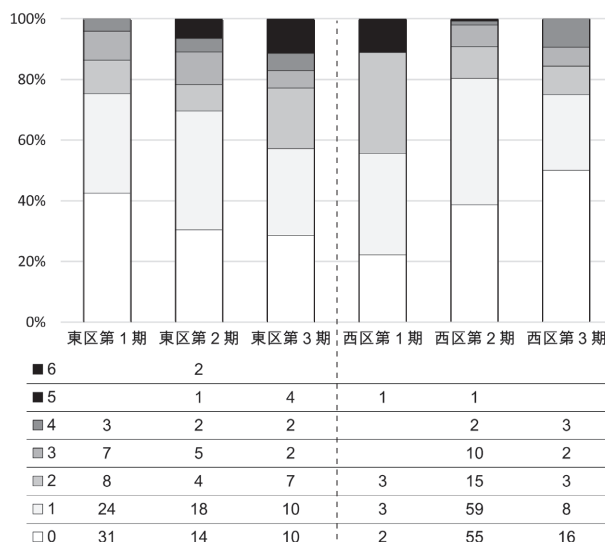


図 13 副葬土器点数の比較

ら出土しており、西区からは第2期における3基の簡化石棺しか確認されていない。特に第1期の東区では、より大型の墓から木棺が出土し、それに次ぐ規模の墓から簡化石棺が出土する。第3期でも1点を除いて同じような現象を把握できる。これらより、木棺は簡化石棺に比べより上位階層の墓に用いられたと考えた。転じて第2期では、木棺は東区のみから出土し、西区からは簡化石棺だけが出土する。つまり、木棺と簡化石棺の社会的位置付けを考慮すれば、東区の方が西区よりも社会的上位にあったと考えられる。そして、この想定は墓墳面積や副葬土器点数の分析結果とも整合的である。

(4) 構造

二層台もまた、東区からの検出が圧倒的に多い。表6の第1期では、東区のみから3基の熟土二層台をもつ墓が確認されている。第2期には西区からも検出されるが、その数は東区の半分以下である。そして第3期には、再び東区のみでしか二層台が確認されていない。二層台の有無もまたその他の要素との相関が高い点を考えれば、墓の構造からも東区の集団がより優位な社会階層にあったことが理解できそうである。

(5) 非日常的副葬品

非日常的副葬品は、表7の通り東西から均等に出土する。第1期には、墓数との関係もあり東区のみでし

表 5 葬具の比較

	東区			西区		
	石棺	簡化石棺	木棺	石棺	簡化石棺	木棺
第 1 期		6	5			
第 2 期	1		7		3	
第 3 期		1	3			

表 6 構造の比較

	東区		西区	
	熟土二層台	生土二層台	熟土二層台	生土二層台
第 1 期	3			
第 2 期	4	3	2	1
第 3 期	3			

か確認できないが、ブタ骨とトルコ石のほか、1点のみの出土しかない石鉞がみられる。第 2 期になると、二里頭系の酒器である鬻や角、爵が両区域で出土し、二里頭文化と何らかの交流があったことが疑われる。その後の第 3 期になると、東区からは非日常的副葬品の出土がなくなる。一方、西区では鬻をはじめ獣骨やトルコ石が副葬される。

このようにみると、第 2 期以降に二里頭系の土器が出土しはじめることを除き、時期による副葬品の種類に大きな変化はない。しかし、墓数は東区の方が多いにも関わらず、非日常的副葬品の出土数は西区に増加傾向が認められる。

(6) 小結

各要素における東西両区の比較を通し、第 1 期における副葬土器点数および非日常的副葬品を除き、西区よりも東区の集団の方がより優位な状況を示すことが明らかとなった。要素間に相関があるため、このことは東区により多くの階層上位者が葬られたことを意味しよう。多くの階層上位者が存在した東区の集団は、当然、西区よりも集団として相対的優位な立場にあったと考えるべきである。つまり、劉荘遺跡では、東区の集団を中心に社会が編成された可能性が高い。

3 時期にわたる墓の変遷を考えると、墓数をみれば明らかに東区が早く形成されはじめ、それに遅れて西区に墓が出現する。これは西区集団が東区から分節した可能性をも示唆するが、いずれにせよ墓地形成に先立つ集落の成立に深く関与した東区が社会的上位に位置づけられ、一貫してそれを維持するだけの政治的経済的優位な状況にあったと考えられる。

ただし、非日常的副葬品が集団間の階層格差と連動しない点は注意する必要がある。量ではなく質でより細かな階層差を表示できる非日常的副葬品を階層上位集団が採用しないことは、当時の社会がそれらを受容する必要のない階層化の未熟な段階にあったか、あるいは階層化の程度に関わらず根本的にこれらの遺物に価値を見出さない社会であったかのどちらかである。ここまでの分析や二里岡期における酒器の礼器化などを考えれば、前者の理由であった可能性が高いだろう。

5. 階層上位墓の分布と墓の配列

ここでは、すでに抽出した東西両集団の内部が異なる構造であったのかについて、階層上位墓の分布から分析を加える。ここで階層上位墓と定義するのは、表 4 に示した大型墓を主として、①墓壇面積が 1.5㎡以上、②副葬土器を 3 点以上出土、③葬具をもつ、④二層台をもつ、という 4 条件のうち、数を確保するために 2 つ以上の条件を備えた墓とする。ただし、第 1 期については副葬土器点数がその他の要素と相関しないため、それを除く 3 条件のうち、とりあえず墓壇面積 1.5㎡以上という条件を満たす墓も加えておく。

まず、墓の平面配置をみると、東西の 2 群に分かれるほか、それぞれの内部で明確な墓列を構成することが分かる。一部に長軸が同一方向を向く墓列もみられるが、大部分は長軸が平行する方向に並ぶ。これらの単位がどのレベルの集団に相当するのかについては意見が分かるところであろうし、当時の埋葬が血縁か婚姻どちらが優先されるかなどの前提条件も不明である。しかし、墓の空間的な配列や遠近は血縁と強く結びつくことが多いことを考えれば、可能性としては一

表 7 非日常的副葬品の比較

	東区					西区						
	鬻	爵	角	ブタ骨等	トルコ石・玉	石鉞	鬻	爵	角	ブタ骨等	トルコ石・玉	石鉞
第 1 期				3	1	1						
第 2 期	1		1				1	1		1	1	
第 3 期							1		2		2	

列が一代を示すか、あるいは複数世代にわたる家族を示すと考えられる。そうであれば、空間的に近接する列はいくつかの家族が集まった血縁関係をもつ出自集団ということになり、これらが累積的に墓をつくった結果、東西それぞれの墓群が形成されたと理解できよう。

そこで、階層上位墓の分布を図 14 のように重ね合わせると、それらが特定の列に偏るのではなく、東区を中心として、一列に 1-2 基が分布し、墓地全体に分散する状況を確認することができる。これは、特定の家族に階層上位者が集中するのではなく、各家族あるいは世代に 1 名か 2 名の厚葬者が存在したことを意味する。これら階層上位墓の被葬者は、家族や世代の中で中心的な役割を果たすとともに集落の運営にも重要な地位にあり、それらを第 1 期から第 3 期まで常に輩出した東区の集団は、やはり相対的に優位な出自集団であったと考えられよう。

また、繰り返しになるが、これら階層上位墓の被葬者は男性とは限らない。少なくとも第 2 期までは女性も一定数が確認されている。つまり、劉莊遺跡の社会においては、単純に父系社会であったとすることはできない。これは新石器時代以降、次第に父系の階層社会へと向かうとされる既存の研究に、疑問を投げかけざるを得ない結果となった。

以上のように、劉莊遺跡では階層上位墓が家族や世代単位で分散する状況にある。分布状況より東西両出自集団に階層格差が存在したことが分かり、個人レベルの階層差の存在も合わせて考えると、氏族間およびその内部、成員間の平等を基本とする部族社会を明らかに抜け出している。しかし、階層差もいまだ曖昧な部分を残し、非日常的副葬品も階層構造に組み込まれない。つまり、劉莊遺跡の社会はいまだ階層化社会へ向かう萌芽的段階にあったということになる。

ところで、すでに言及したように、劉莊遺跡では第 2・3 期に属する 3 基の墓から計 5 点の二里頭系酒器が出土している。第 2 期の 159 号墓は面積 2 m² で木棺や二層台をもち、副葬土器も 6 点を数える階層上位墓であり、鬻と角を出土する。一方、鬻と爵を出土する 262 号墓と鬻を出土する 147 号墓は、それぞれ小・中型の墓であり、既に分析したように階層構造と二里頭系の酒器が必ずしも結びつかないことが分かる。また、これらの墓は東西両区にみられ、特定の集団が酒器を専有する状況にもない。つまり明確な傾向を見出すことは難しいといわざるを得ず、偶発的に入手したこれらの酒器を、その希少性から個人的に副葬したとしか考えられない。しかし、5 点しかない酒器のうち

の 4 点を 2 基の被葬者が所有する状況は、二里頭系酒器を入手するルートが一部に限られていたことを示すのかもしれない。

6. 下七垣文化内における劉莊遺跡と他遺跡の関係

劉莊遺跡以外の下七垣文化に属する遺跡からは、まとまった形で墓の報告はなされていない。しかし、数は少ないが 5 遺跡ほどで墓の報告はみられる。ただし、葛家莊遺跡は子供の瓮棺葬、孫村遺跡も子供の二人合葬、朱崗遺跡は乱葬坑と考えられるため除外し、典型的な竪穴土壙墓がみられる孟莊遺跡を中心に概観し、それに鄆鄧遺跡と詳細は未報告だが概要が公表されている南城遺跡を加え、下七垣文化における劉莊遺跡の位置付けを明らかにする。それぞれの遺跡の位置については、図 1 を確認してほしい。

鄆鄧遺跡では、1 基のみだが竪穴土壙墓の報告がみられる（河南省文物考古研究所 2012）。長軸 2.5 m、幅 0.7 m と大型墓に属するが、副葬品は鬻が 1 点のみである。他に墓の報告がないため、遺跡内における相対的位置付けは判断できないが、鬻を副葬する点で劉莊遺跡との共通点を見出すことができる。

孟莊遺跡はいわゆる下七垣文化輝衛類型に属し、唯一の城壁をもつ遺跡として知られる。秦小麗により二里頭文化の強い影響が指摘されるが（秦 2001）、後述するように墓の出土遺物を分析すると明らかに下七垣文化との共通性が高く、葬制からみればこれに属すると考えるべきである⁷⁾。墓は 23 基が報告されており、すべて長方形竪穴土壙墓である（河南省文物考古研究所 2003）。報告ではこれらの墓に時期差を認め、出土土器から判断すれば本論の劉莊第 1 期から第 3 期までを含むようである。しかし、報告では詳細な検討がなされておらず、層位が共通する一部を除いて各墓の所属年代の検討は難しい。ただし墓群等は時期を通して明確であるため、一部の墓の年代差を捨象して、大まかな傾向を把握する。

まず、墓壙面積の大きいものから順に並べた表 8 から各要素間の対応関係を確認すると、二層台や葬具はほぼみられないものの、墓壙面積の大きい墓ほど副葬品が多い傾向にあることが分かる。副葬品の内容を見ると鬻が最も多く、それに豆、盆、罐が続く。また、その組成は、鬻、豆あるいは簋、盆が軸となり構成される。罐を出土する墓は、劉莊遺跡と同様に早い時期に属する可能性がある。さらに、墓壙面積が大きい墓にも女性が埋葬される。大局的にみれば、これらの特徴は劉莊遺跡と近似しており、葬制に強い共通性が存

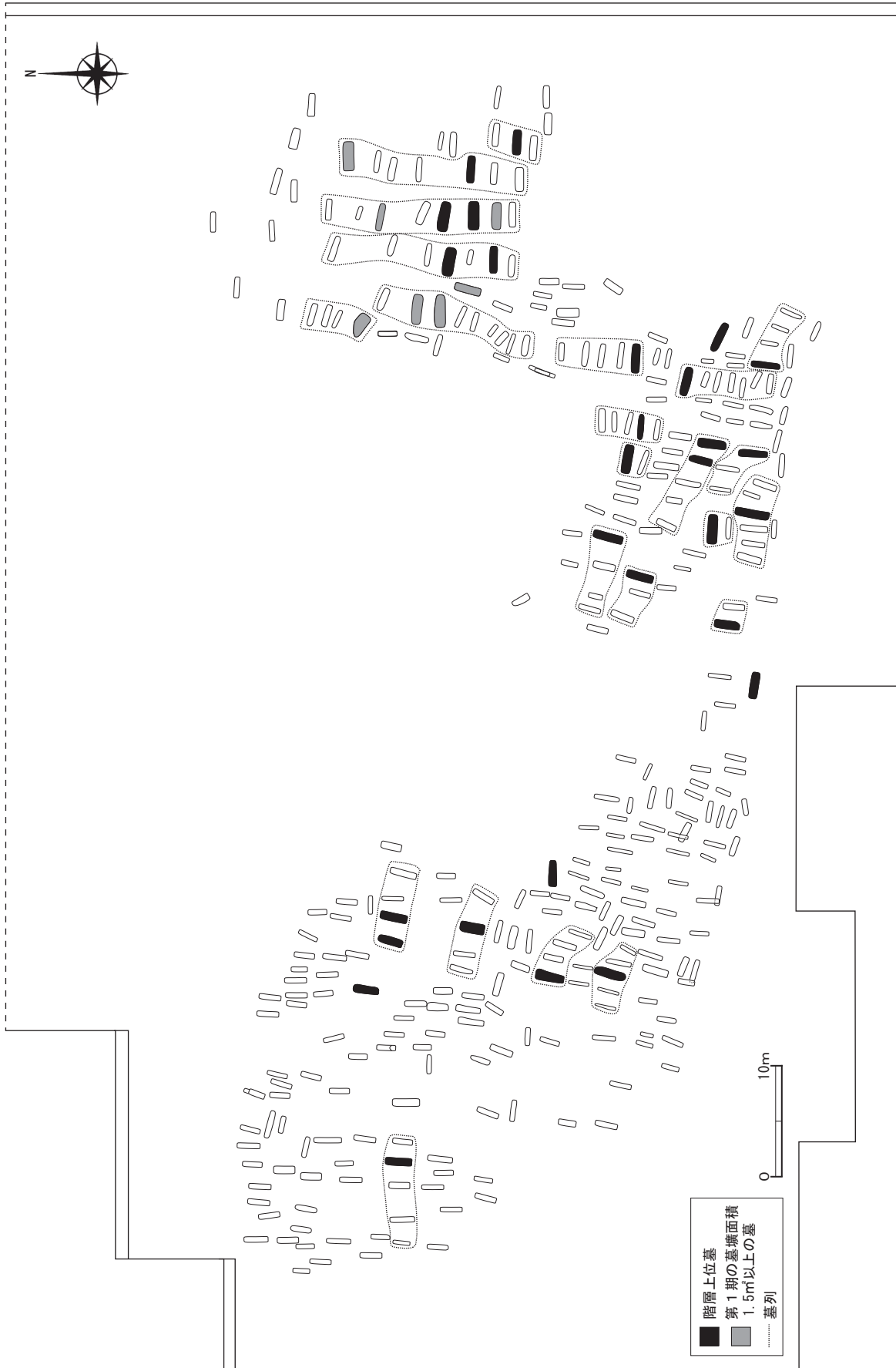


図 14 階層上位墓の分布

表8 孟莊遺跡における墓の各要素の対応関係

墓番号	性別	年齢	長軸(m)	短軸(m)	面積(m ²)	葬具	副葬土器 点数	副葬土器内容
XIII T 149M6	女	成年	1.76	0.88	1.55		4	鬲2・盆・簋
VIII T 134M51			2.20	0.70	1.54		3	豆2・小罐
VIII T 174M45	男	55以上	2.00	0.70	1.40		3	豆・盆・鼎
XIII T 149M10	男	40-45	2.10	0.60	1.26		3	鬲・豆2
VIII T 154M43	男	成年	1.50	0.75	1.13	棺	2	盆・小罐
VIII T 89M17	男	30-35	2.00	0.55	1.10		1	鬲
XIII T 149M8	女	30-35	1.95	0.55	1.07		4	盆2・瓮・甗
XIII T 149M7	男	成年	1.75	0.60	1.05		0	
VIII T 155M55			1.90	0.55	1.05		0	
VIII T 153M53			1.85	0.50	0.93		0	
VIII T 153M52			1.80	0.50	0.90		1	小罐
VIII T 171M26			1.50	0.60	0.90		3	鬲・豆・盆
XXI T 303M1			1.75	0.45	0.79		1	小罐
VIII T 171M28	女	30-35	1.72	0.45	0.77		1	鬲
XIII T 128M22		2-4	1.88	0.40	0.75		0	
VIII T 133M57			1.60	0.45	0.72		0	
VIII T 171M20			1.70	0.40	0.68		1	鬲
VIII T 171M24			1.70	0.40	0.68		0	
VIII T 171M22			1.00	0.60	0.60		0	
XIII T 149M9		6ほど	1.35	0.35	0.47		0	
VIII T 152M36			1.05	0.40	0.42		1	鬲
VIII T 152M37			0.85	0.40	0.34		0	
VIII T 135M49	女	15-17	50以上	20	0.10以上		1	豆

在することが分かる。

さらに墓の平面分布を確認する。孟莊遺跡の下七垣文化期の墓は3つの発掘区から確認されており、特に図15に示す西城壁内側のⅧ区とⅩⅢ区から多く検出される。ともに南北からやや東に偏る長軸をもち、東西方向に並ぶ傾向があるのも劉莊遺跡と共通する点である。遺構の切り合いは激しいが、Ⅷ区では墓の配列から大きく東西二つの墓群に分けられそうである。墓の規模は劉莊遺跡と比べて相対的に小さいが、仮に墓壙面積1.10m²以上、副葬土器点数2点以上を満たす墓の分布を確認すると、東西に列をなす東の墓群の中で同列に集中することはなく、むしろ各墓列に分散して分布するように見える。一方、西の墓群には相対的に大型の墓はみられず、墓列も不明瞭である。遺構の切り合いによる破壊も考慮する必要がある。ⅩⅢ区では、ほぼ1箇所まで東西方向に並ぶ墓列が確認できる。6号墓は8号墓を切るため、やや時間的に遅れる可能性があるが除外して考えても、ここでもⅧ区と同様に、一つの墓列に1基の大型墓が分布する。以上のような各列に少数の大型墓が分布する状況や墓群間で大型墓の分布が異なる点はまさに劉莊遺跡と共通する現象であり、城壁をもつ特殊な遺跡という位置付けにありながらも、その背景にある社会構造は劉莊遺跡と近

似したことを示唆する。

次に、概要が公表されている南城遺跡出土の墓について検討する。南城遺跡からは82基の墓が検出されており、すべて長方形竪穴土壙墓である(石ほか2012)。概要からでは詳細な時期の検討はできないが、大部分が東西軸で、第6層の下に位置することから、比較的近接した時期につくられたと考えられる。土器から判断すれば、大まかに劉莊遺跡の第1期から第2期ほどに相当しよう。個別の墓の規模は不明だが、長軸2.7 - 1.7 m、短軸1.1 - 0.45 mと一定の幅があり、階層差の存在を示唆する。概要の文面から墓の構造と副葬品の内容を拾い集めると、一定の傾向を読み取ることができる。

まず葬具および構造には、棺と槨をもつ墓が1基、棺をもつ墓が2基、二層台をもつ墓が22基、何ももたない墓が57基みられる。これらと副葬土器の対応関係を整理すると、棺と槨をもつ15号墓には豆・盆・鼎の3点の土器に加え、玉飾・貝覆面が副葬される。相対的にみれば明らかに厚葬であり、規模との対応関係は不明であるものの、階層上位墓である可能性が高い。棺や二層台をもつ墓には副葬品がみられない例も散見されるが、1 - 4点の土器が副葬される。一方、葬具や構造をもたない大部分の墓には、1点の土器が

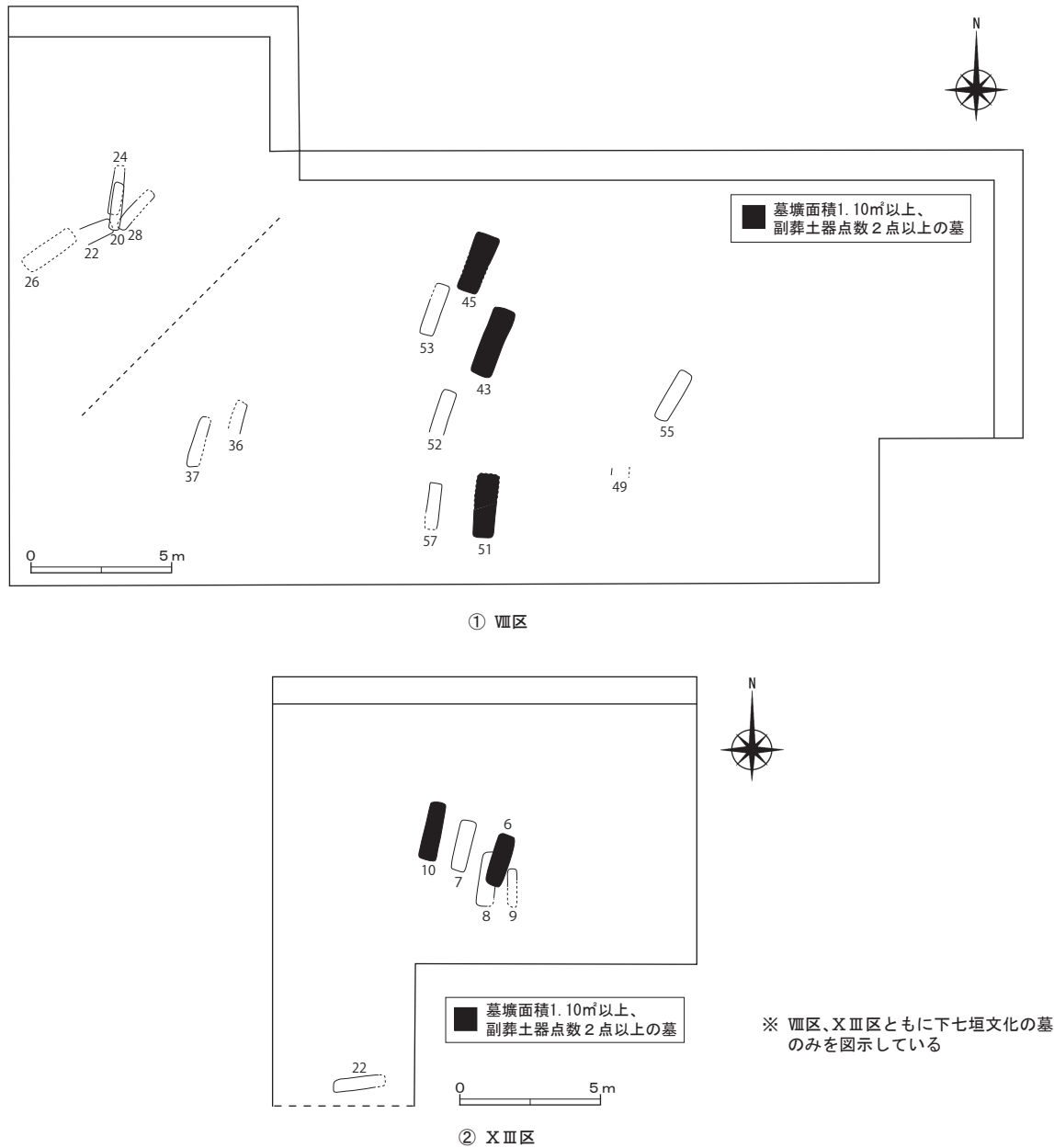


図 15 孟莊遺跡VIII区およびXIII区における墓の分布

副葬される例が多い。このように、大まかに葬具および構造と副葬土器の点数は相関する傾向にある。しかし、土器以外の玉飾や貝製品などの非日常的副葬品については、階層上位墓とした 15 号墓を除いて、大部分が葬具や二層台をもたない墓から出土しており、一概に階層構造と結びつくとはいえないようである。さらに土器の組成であるが、南城遺跡では鼎と鬲の出土が多く、これに豆や盆が組み合わさり、上位の墓に副葬される。鼎と鬲は共伴せず、排他的な関係にあり、やはり煮沸器という枠組みで両器種を捉え、それに供膳器である豆や盆を加えたのだろう。鼎が多い点は南城遺跡の特徴であるが、鬲もほぼ同数が出土しており、

大枠としては劉莊遺跡の状況に近いといえよう。

平面分布については、公表された図面が粗く墓番号が読み取れないため、詳細な分布状況がつかめない⁸⁾。しかし、劉莊遺跡と同様に、図 16 に示す通り南北 60 m、東西 30 m の範囲内で東西軸の墓が南北方向に整然と列をなす。墓同士の間には切り合いがほとんど認められない点も、劉莊遺跡と類似する。中央やや北寄りの部分に空白地帯があり、ここを境に南北に区分できそうである。平面からは墓群や列で墓壇の規模に偏りがないように理解でき、これらを出自集団や家族と考えれば、それぞれの単位で階層上位墓がつけられたと考えられよう。

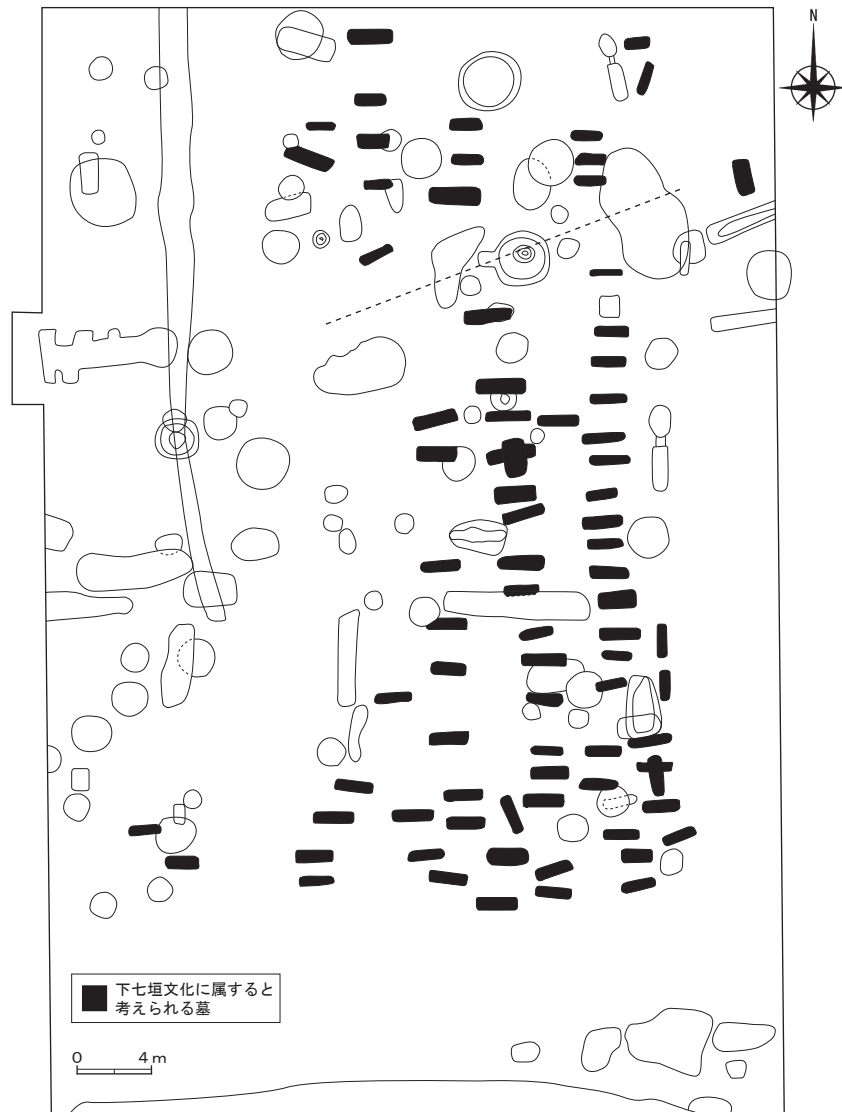


図 16 南城遺跡における墓の分布

ここまで下七垣文化に属する各遺跡の墓を分析してきた。墓の各要素の相関関係、そこから分かる階層構造、上・下位階層墓の規模や副葬土器点数、副葬土器の組成、平面分布、非日常的副葬品の在り方など、多くの点において劉莊遺跡で明らかにした葬制と近似する傾向がみられた。もちろん、各遺跡の独自性も無視することはできないが、大局的にみれば、これらの遺跡の背景にある社会構造には一定の共通性が存在すると考えるべきである。つまり、劉莊遺跡の社会構造を下七垣文化全体にまで一定程度、敷衍して考えても大きな間違いはないと考えられる。

7. 他文化との関係

最後により視野を広げ、後続する二里岡期や同時期の二里头文化との関係について考えてみたい。墓の平

面分布については墓地の全面発掘など良好な資料があまりみられないため、特に階層性を中心に検討を行う。

(1) 二里岡下層期との比較

下七垣文化のあとに直接つながるのは、二里岡下層期であることに疑いの余地はない。一部に下七垣文化末期が二里岡期と一部併行すると指摘する見解もあるが（中国社会科学院考古研究所 2003）、ここでは詳細な年代観について立ち入らないでおく⁹⁾。

郟向平は二里岡期から殷墟期の殷文化を6段階に区分し、そのうちの第I段階をいわゆる二里岡下層期相当とする（郟 2011）。この段階には鄭州商城や偃師商城、孟莊遺跡、東下馮遺跡、盤龍城遺跡などで墓が確認されている。また、郟は殷文化の墓について墓壙面積を中心とした基準から4ランクに分けている。そ

して、第 I 段階の二里岡下層期にはそのうちの第 3・4 ランクの墓がみられるとする。第 4 ランクの墓は墓壙面積が 1 m²以下で、その大部分が副葬品をもたないか土器のみである。第 3 ランクは、墓壙面積が 1 - 3 m²であり、青銅製や陶製の礼器、玉器など、多様な副葬品を出土すると考える。

劉莊遺跡では社会階層を副葬土器の「質」ではなく「数」で表示し、そのため非日常的副葬品も墓の規模とは対応しない。したがって、副葬品という点では二里岡下層期と差異がみられるが、その墓壙面積については劉莊遺跡で最大の第 1 期東区 3 号墓が 2.96 m²を測り、ちょうど第 3 ランクの規模に合致する。また第 4 ランクについても、その規模や副葬品をもたないという点で、劉莊遺跡にもそれに相当する墓は多く存在する。つまり、墓の規模からみた下七垣文化と二里岡下層期の階層構造は階層分化がそれほど進展せず、非常に近似しており、前者から後者への変遷は、非常に連続的かつスムーズな変化であったことが分かる。

一方、副葬品については、二里岡下層期では規模と相関するという。当該期の副葬品の内容をみると、やはり煮沸器としての鬲が多く、それに供膳器の豆や盆あるいはそれらと機能的互換性をもつ簋や罍などがみられる。このような軸となる副葬品の共通性から判断すれば、下七垣文化とのつながりの強さは明らかである。一方、階層上位墓である部の第 3 ランクの墓をみると、鄭州商城 C 8 の 7 号墓では、青銅容器として二里頭文化で酒器とされていた爵や罍のほか、青銅戈、玉戈などが新たにみられるようになる（河南省文物考古研究所 2001）。また、盤龍城遺跡 PYW 6 号墓からは陶製および青銅製の鬲各 1 点のほか、青銅爵や玉戈が出土し、PYZ 8 号墓からは陶製の鬲、罍、盆のほか、爵が出土している（湖北省文物考古研究所 2001）。つまり、二里岡下層期になると下七垣文化からの鬲や豆、盆を中心とする煮沸器と供膳器の副葬品のセットに加え、これまで指摘されているように、明らかに二里頭文化の酒器が入れられるようになる。二里頭系酒器は劉莊遺跡でも非日常的副葬品として出土したが、階層表示機能を付加されることのなかった遺物である。さらに、青銅器の鑄造技術を受容し、青銅製の副葬容器を製作するようになる点でも二里頭文化の影響をみて取ることができる。つまり、下七垣文化から二里岡下層期にかけての二里頭文化に起源する酒器と青銅器鑄造技術の新たな導入およびそれらへの階層表示機能の付加により殷文化がより細分化され、「量」だけではなく「質」も重視した階層表示方法を手に入れたとすることもできよう。また、玉器なども劉莊遺跡

では階層差と相関しない要素であったが、二里岡下層期には階層上位墓に副葬される。この点からも、副葬品の認識に大きな転換があったことが分かる。

墓の規模と副葬品の内容を合わせて考えると、規模という点では両時期に大きな変化はみられない一方、階層上位墓における副葬品の内容については明確に複雑化を認識することができる。これは、下七垣文化の社会構造が二里頭文化の先進的な階層表示方法を受容し、自らの葬制を改変した結果と理解できる。もちろん、今後の調査によって二里岡下層期における大墓がみつかる可能性も否定できないが、現状では以後の殷文化の複雑化した社会構造が形成される萌芽が、下七垣文化から二里岡下層期の間にみられることは間違いない。

(2) 二里頭文化との比較

二里頭文化でみられる墓の研究は、80 年代以降、多くの研究者によって精力的に進められてきた。特にその階層構造に関する研究では、日中の学者によってその大枠が示されている（飯島 1985；小澤 1998；宮本 2005；鄭 1994；繆ほか 1988 など）。中でも李志鵬は二里頭文化の墓を集成し、その階層構造について体系的な研究を行っている（李志鵬 2008）。

それによると、墓壙面積や葬具、副葬品の分析から、二里頭文化の墓は表 9 の通り大きく 5 ランクに区分できる。第 5 ランクの乱葬坑はやや特殊な位置付けであるため除外して考えても、これらの階層差に副葬品の量や質が相関することは間違いない。劉莊遺跡と比較すると、規模については大差なく、劉莊遺跡の階層上位墓は二里頭遺跡の第 1 ランクとそれほど変わらない。また、木棺をもつ点でも共通する。二里岡下層期も含めて、この時期にはいわゆる隔絶した規模をもつ大墓が存在しなかったのかどうか、今後の調査に結論を委ねるしかない。しかしながら、二里頭文化では青銅礼器や玉製品、トルコ石など、劉莊遺跡で階層構造と結びつかない非日常的副葬品が階層上位墓から出土し、明らかに劉莊遺跡とは異なる様相を呈する。これらの事実は、二里頭文化の社会階層が同時代の下七垣文化よりも、さらに複雑化した状況にあったことを意味する。ただし、二里頭文化の階層上位墓の中で第 1 ランクに相当する墓は、すべて二里頭遺跡で確認されたものであり、その中心遺跡としての性格を考えると、遺跡規模から下七垣文化における一般集落に付随する墓地と考えられる劉莊遺跡とは直接的に比較できない。それでは、二里頭文化の一般集落遺跡の墓はどのような状況にあったのであろうか。

表9 二里頭文化の階層構造

ランク	細分	面積	木棺	朱砂	主な副葬品内容	備考
I		2㎡以上	有	有	青銅礼器・陶製酒器・玉器・トルコ石製品・円陶片・漆器・海貝	
II	A	1.2㎡以上	有	有	陶製酒器・玉器・トルコ石製品・円陶片・一部に漆器・海貝	
	B	1㎡ほど	一部有	有	陶製酒器・一部に小型玉器・トルコ石製品・漆器・海貝	
III	A	1㎡以下	無	無	日用土器	
	B				—	窯洞墓（東下瀆遺跡）
IV		0.8㎡以下	無	無	なし	
V					—	乱葬墓（一部は祭祀坑）

※ 李志鵬2008をもとに作成

二里頭文化に属する遺跡の規模から、その規模を4ランクに区分したのは劉莉である（劉2007）。300万㎡の二里頭遺跡を最大として、それに次ぐ中心である60万㎡ほどの稍柴遺跡など、さらにその下の15万—25万㎡ほどの大型集落、そして13万㎡以下で小型の一般集落に分けている。李志鵬による第2ランクの墓は、大部分がこのうちの大型集落以上の遺跡でしか確認されておらず、二里頭文化が二里頭遺跡を頂点にその社会構造を形成し、維持していたことを理解できる。問題は、二里頭社会における一般集落の階層構造である。

現在まで二里頭文化の一般集落レベルの遺跡で、墓地あるいは墓域が全面的に発掘された良好な事例はなく、一部の発掘資料から全体を推測するしかない。洛陽東馬溝遺跡は中国文物地図集で5万㎡ほどの規模と報告される二里頭遺跡の一般集落レベルの遺跡と考えられる（国家文物局1991）。簡報では二里頭文化第2期ほどに属する7基の墓が報告され、墓域の一部であると推測する（洛陽博物館1978）。表10では確認された墓を長軸の値が大きいものから並べている。7基の墓のうちの6基から副葬土器が出土しており、2号墓の規模がやや突出してはいるものの、それを除くと大型の合葬墓である8号墓から6点が出土し、それ以外からは2—3点が確認できる。また、長軸の値が最も小さい10号墓も合葬墓であるが、副葬品の出土はみられない。つまり、一定程度、規模と副葬品数が相関する傾向にあるといえる。また、本論で非日常的副葬品とした二里頭系酒器の鬻や爵、盃が4基の墓から出土しており、これらはいずれも相対的に大型の墓であることから、階層上位墓に非日常的副葬品が入れられたことが分かる。

このような傾向は約4万㎡の二里頭文化第3期あるいは第4期ほどとされる滎陽西史村遺跡でも同様であり¹⁰⁾、若干の時期差は認められるものの、長軸2.2mを測る1号墓からは爵や盃を含む5点の土器に加

え、玉器や海貝が出土する。一方、それ以外の墓では日常土器が1点か、あるいは副葬品がみられない例ばかりである（鄭州市博物館1981）。やはり、明確な階層構造が存在し、さらに酒器や玉器がそれに対応するように副葬される。

つまり、二里頭文化の少なくとも畿内とされる地域の一般集落レベルの遺跡でも、墓の規模や副葬品の数が社会階層に対応するのである。また、それだけではなく、酒器や玉器など非日常的副葬品を用いた「質」の違いに基づく階層表示を行っていたことになる。二里頭文化では、このような一般集落レベルまで一元的な階層規範が及んでいる点で、高度に組織化された社会であったと評価できる。このような階層規範は、特に二里頭文化第3期の二里頭遺跡と伊洛河流域を中心とする範囲から、二里頭文化第4期の二里頭文化二里頭類型の分布範囲へと、段階的に拡大すると指摘されており（徳留2009）、階層規範が一定の時間を要しながら浸透したことが分かる。

劉荘遺跡を代表とする下七垣文化と比較すると、墓の規模や副葬土器の数についてはそれほど大きな違いはない一方、階層表示においては二里頭文化がより先進的な内容を有していたといえる。下七垣文化の社会では二里頭系酒器の意味が理解されず、ただその希少性から階層の上下を問わず墓に副葬された。その意味を理解するのは、既述したように二里岡下層期以降であり、二里頭文化二里頭類型の分布範囲からその外側への波及にもさらなる時間を要したと理解できる。しかし、その波及は、二里頭類型内への拡大とはことなる。下七垣文化でも副葬された鬻をはじめとする土器などに付加される形で二里頭系酒器を取り入れることから、殷系文化を担った人々が主体的に受容したと考えられる。下七垣文化以降の階層化の進展に伴い、階層表示機能の多様化に迫られたことが背景にあらう。その結果として、二里頭文化の階層表示機能を理解し、受容したのである。

表 10 東馬溝遺跡の墓一覧

墓番号	長軸(m)	短軸(m)	葬具	副葬土器点数	副葬土器内容	備考
2	2.42	1.05		3	爵・盆・三足盤	
8	2.1	0.77	木棺?	6	鬻2・豆・盆2・罐	2人合葬
1	1.96	0.4		2	鬻・豆	
9	1.92	0.55	木棺	3	豆・盆・三足盤	
5	1.9	0.4-0.54		3	盃・豆・三足盤	
6	1.85	0.47		3	豆・盆・三足盤	
10	1.62	0.6				2人合葬

本節の最後に、二里頭文化における墓の平面分布について言及しておきたい。既述のように、現状で二里頭文化における墓地の良好な発掘資料は報告されていない。二里頭遺跡では一般的に墓域と居住域が明確に分けられず、いわゆる特定の墓地が存在しないという指摘もなされることがあるが（中国社会科学院考古研究所 2014）、一定の空間内に列をつくって集中する傾向はあるようである。そして、これらは家族を中心とする親族組織による墓群であると理解されている（李志鵬 2008）。そこでいう家族が基本家族か大家族か、後者ならば直系型か傍系型かなどの問題も存在するが、その中には様々なランクの墓が含まれるため、親族集団内で階層分化が進んでいとされる。さらに墓群間でも規模の差があることから親族集団間に階層格差が存在したと指摘される。このような理解と宮殿区を含むV区や遺跡中心部であるIV・VI区に階層上位墓が多い事実を合わせて考えると、出自を異にするいくつかの集団が二里頭遺跡には存在し、その中で特に経済や政治など多方面に及ぶ権力を掌握した集団が二里頭社会の上位階層を形成したと理解できる。

重要なのは、このような集団内および集団間に階層格差が存在するという構造が、劉莊遺跡と共通する点である。異なるのは、特定の集団への権力の集中度合であり、これこそが中心遺跡と一般遺跡の差であり、二里頭文化と下七垣文化の差であるといえよう。あるいは、階層表示方法に差異は認められるが、二里頭文化で良好な墓地資料が発掘されれば、やはり劉莊遺跡と同様の集団構造を示すのではなかろうか。

8. 結論

ここまでの検討を通して、劉莊遺跡が下七垣文化の中で一般的な規模の集団が形成した墓地であり、土器と墓の空間分布から東西2集団により3時期にわたって形成されたことを明らかにした。また、集団内には階層格差が存在し、特に第2期以降、副葬土器点数や組

成も階層を示す要素となり、階層格差も拡大すると考えた。しかし、非日常的副葬品は一貫して階層表示機能をもたず、劉莊遺跡では副葬品の「質」ではなく「量」や「組成」で階層差を示したのである。さらに、このような格差は集団間にも存在し、東区集団が集落の主導的な地位にあったと想定した。この集団間の階層格差を決定づけるのは大型墓の分布状況であり、東西の出自を同じくする集団内の家族あるいは世代単位で分散し、このような階層上位者を常に輩出した東区がより優位な社会であったのである。ただし、突出した地位の不在や階層表示システムの未整備からは階層化社会が成熟した状況を把握できず、その萌芽段階に位置付けることができた。

さらに下七垣文化に属する他遺跡の分析から、劉莊遺跡で描出した社会構造は下七垣文化全体に敷衍できると考えた。このような社会構造は、その後に階層表示という点でより先進的な同時代の二里頭文化から、酒器を中心とする非日常的副葬品の意味や青銅器の製作技術とその価値体系を受容し、下七垣文化から続く高を中心とする副葬習慣に新たな要素を付加していく。かつて、二里岡期にみられる青銅製の煮沸器や供膳器の起源を山東龍山文化に求める見解があったが（宮本 2006）、少なくとも本論の分析ではそれらの器種組成は在地の伝統であり、それに二里頭文化からの酒器や青銅器製作技術を受容したと理解した。そして、その結果として後続する二里岡期以降の殷系文化の葬制が成立していくのである。見方を変えれば、このような変遷は下七垣文化が次第に社会の複雑化に伴う階層分化を達成し、それを固定化する道具として新たな階層表示要素を必要としたことを示している。

このような本論で論じた下七垣文化の社会構造の中で、特に特徴的であるのは非日常的副葬品を階層表示に使用しなかった点であろう。一般的に本論で示したような非日常的副葬品は、その経済的価値や希少性から個人の社会的地位を示す道具として用いられるこ

とが多い。特に二里头系酒器は、既述のように二里头文化の畿内とされる地域を中心に階層上位墓に副葬される。また、同時代においては下七垣文化の北方に位置する夏家店下層文化の大甸子遺跡からも出土することで知られる。大甸子遺跡では鬻や爵が墓壙面積の大きい墓から出土する傾向にある(宮本 2000)。つまり、階層上位墓に二里头系酒器が副葬されるため、これらに一定の価値を見出していたと考えられる。しかし、二里头系酒器は、これまでその地理的中間に位置する下七垣文化で多く出土せず、遠回りとなる山西の盆地を北に抜けるなどの伝播ルートが想定されたこともあった。しかし、今回の分析から考えれば、あるいは下七垣文化の社会がそれらを必要とする素地をもたないため、出土が確認できなかった可能性もある。一方、墓壙面積や副葬品からみれば明らかに下七垣文化よりも階層分化が進展していた大甸子遺跡では、在地の階層上位者が自らの社会的地位を表象するために、二里头系酒器を必要としたのである。その結果、飛び地ともいえる内蒙古東南部で出土したと考えられる。

ところで、これまで下七垣文化は先商文化という枠組みの中で認識され、古典籍の中で語られる「成湯滅夏」に基づくイメージが先行し、夏王朝とされる二里头文化に匹敵するような社会が想像されることもあったかもしれない。しかし、劉莊遺跡を通して明らかにしたその実態の一端は、階層分化も未成熟で集団構造も二つの出自集団から成る比較的単純な社会であった。大汶口文化の階層性を検討した渡辺芳郎は、その階層差の程度を判断する基準として「連続性」と「非連続性」という概念を採用する(渡辺 1992)。つまり、墓壙規模や副葬品数など階層差を示す要素の変異幅について、それが小さく連続的であれば階層性の程度が低く、大きく非連続的であれば高いということになる。本論で示した劉莊遺跡の階層性を示す要素は、第1期において規模や副葬品数が連続的であり、第2期以降にそれらの相関性が高まるとともに非連続的な傾向に変化する。したがって、第1期から第2期にかけて次第に階層性の程度が高まり、副葬土器組成の固定化に伴い階層規範が整備されるのである。しかし、水平的な階層性の差異について本論では詳細な検討を行わなかったが、この劉莊遺跡の階層分化の程度は、渡辺が明らかにした大汶口文化の中・後期の様相と大差ないのである。また、平面分布でも「質的に上位の要素を持つ墓の有無によって、墓群間に差異が表れている」とする点で、ほぼ同様である。渡辺が質的階層性とする非日常的副葬品の他要素との相関が大汶口文化後期に向かい高まる様相と比較すれば、むしろ劉莊遺跡の

社会は相対的に複雑化の進展が遅れる状況にある。大汶口文化やその後の山東龍山文化を中心とする山東地区は、新石器時代を通して特に階層化が進んだ地域であるとしても、下七垣文化期における劉莊遺跡の社会構造は、新石器時代の大汶口文化中・後期とそれほど変わらなかったと考えられる。もちろん、既述したように劉莊遺跡は必ずしも下七垣文化における中心遺跡ではなく、一般集落に付随する墓地遺跡である。しかし、現状で中心遺跡が発見されず、他遺跡の分析から明らかにしたように、劉莊遺跡の社会構造がある程度、下七垣文化全体を反映するのであれば、下七垣文化の社会構造は新石器時代から大きく進化した訳ではなかったといわざるを得ない。

ただし、後続する二里岡期には偃師商城や鄭州商城をはじめとする集約的な労働を必要とするような大型遺跡が出現する。また、下七垣文化にはほとんどみられない高度な技術を必要とする青銅器が出現する。つまり、下七垣文化から二里岡期にかけて、すでに触れたような階層分化とその固定化に伴う酒器などの要素以外にも、社会の複雑化を示す要素が急激に増加する。今一度、劉莊遺跡を振り返ると、第2期以降に副葬土器数やその組成が整備され、次第に階層表示方法が増加する。この劉莊遺跡第2期は胡・王両氏による編年の第2段におおよそ併行し、二里头文化第2期後葉から第3期前葉に相当する。ちょうど、この時期には黄河以北のいわゆる豫北に二里头系の勢力が進出し、府城遺跡や孟莊遺跡を中心に勢力を拡大したと考えられている(秦 2001)。それらの遺跡にみられる大型建築基壇や城壁がどの勢力により構築されたのかという問題も考える必要があるが、重要なのはこの時期に下七垣文化と二里头文化が直接的な接触をもち始めたことである。また、二里头文化第4期には、逆に下七垣文化が豫北から南へと広がる。この下七垣文化の南下については豫北と豫東の東西2ルートの存在が指摘され(王立新ほか 2011)、特に豫東ルートについてはいわゆる鹿台崗類型を成立せしめる(魏 1999)。このように二里头文化や下七垣文化が活発な動きを示す時期に、下七垣文化の社会構造が変化の兆しを示し始めるのは偶然であろうか。両文化が頻繁に接触する過程で社会構造を変化させる事象、あるいは戦いなどが起こり、それを契機に社会の複雑化が進んだ可能性も排除できない。戦いは社会の複雑化を促す重要な要因の一つである。新石器時代については若干の研究がみられるが(岡村 1993)、このような視点から初期王朝時代を論じた研究はあまりみられない。また、考古学的な痕跡を把握する議論も深化してこなかった。今

後、検討する価値のある視点であることは間違いなく、ここまで述べたような社会構造の下七垣文化が、高度に発達した社会階層と広域に及ぶ影響力をもつ二里頭文化とどのように接触し、二里岡期以降の殷系文化へと交替するのか、より多角的な分析が必要となろう。

おわりに

これまでの下七垣文化に関する研究は、その時間軸と空間軸の整理に焦点が絞られ、時期区分や類型区分がメインテーマとなってきた。もちろん、下七垣文化を特徴付ける高の起源問題をはじめ、これらの基礎研究抜きには解決されない問題も多く存在するため、今後もこれらの研究の重要性は不変である。しかし、過去の社会の解明は考古学が目指すべき最も重要な目的の一つであり、すでに一定量の報告と劉荘遺跡のように社会構造に迫ることのできる良好な資料が公表された現在、下七垣文化研究の中でも着手すべき課題である。また、同時期の二里頭文化や後続する二里岡期以降の社会構造に関する研究は、すでに一定の成果を挙げている。しかし、本質的にこれらの文化を理解するためには、相対化が必ず必要であり、下七垣文化の社会構造を明らかにしてこそ、二里頭文化の先進性や二里岡期への段階的発展を浮き彫りにすることができるのである。このような意味で、本論にも一定の学術的な意義を認めることができると信じる。

本論は、下七垣文化の社会構造の一端を明らかにしたのみである。劉荘遺跡の墓地内における副葬土器組成の空間分布、水平的な階層構造の有無など遺跡内における分析に加え、本論で示した下七垣文化の社会構造が適応できる地理的範囲、下七垣文化内における二里頭系酒器を含む本論で非日常的副葬品とした遺物の分布など、今後、下七垣文化の社会構造をより明らかにするために行うべき研究は多い。また、中心集落や大型墓がみつければ、本論で提示した社会構造に大きく修正を加え、より重層的な社会構造を描く必要も出てくる。仮定の話をいくら書いてもきりが無いが、本論が今後増加するであろう下七垣文化の社会研究の礎の一つになることができれば幸いである。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、東京大学人文社会系研究科大貫静夫教授には、毎週行われた勉強会を通して的確な指導を賜った。また、資料調査に当たっては、中国社会科学院考古研究所の趙海濤研究員、河北省文物研究所の張曉崢研究員にご高配を賜った。金沢大学の秦小麗先生からは孟荘遺跡の土器についてアドバイスをいただいた。中国語要旨の作成については、東京大学大学院の周嘉寧氏に

ご協力いただいた。心より感謝申し上げたい。東京大学に在籍させていただいた3年間、佐藤宏之教授、設楽博己教授をはじめとした研究室のメンバーからは、日常的な交流や談話会を通して計り知れないほどのことを学ばせていただいた。本論文の執筆をもって少しでも学恩に報いることができれば幸いである。

なお、本論文は日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号：25・8459）および科学研究費助成金若手研究B（課題番号：15K16868）の研究成果の一部である。

【註】

- 1) 近年、二里頭文化が夏王朝に相当するという見解は、ますます主流になりつつある。しかし、許宏のように当時の文字史料がみつからない状況では、あくまでも仮説の域を脱しておらず、他の可能性も否定することは難しい（許宏 2015）。
- 2) 輝衛型については、より独自性の高い輝衛文化とする見解もある（張立東 1996）。土器からみれば、確かに一定の独自性を有するが、多くが地理的位置に起因する周辺文化の影響力の違いである。輝衛文化を主張する張立東が担当した『中国考古学』夏商卷第3章では「潞王墳—宋窯類遺存」とされ、下七垣文化と区別しつつも別文化とはしておらず（中国社会科学院考古研究所編著 2003）、この点からも独自色の強い文化と認識し難い部分を残すことを推測できる。一方、土器組成からみれば、高、豆、盆、深腹罐、瓮など主要器種については下七垣文化と共通する。したがって、本論では輝衛型を下七垣文化に含めて扱う。
- 3) ただし、中国社会科学院考古研究所の4期区分の第4期は、早商文化に入るとしている。
- 4) 本文中には頸部が高いとあるが、掲載された編年図をみると、明らかに短頸の高が組み入れられている。
- 5) このような解釈についての問題点は、田中良之が詳しく指摘している（田中 1998）。
- 6) 下七垣文化の墓から出土する副葬土器には、生活遺構から出土するものに比べ小型であることがあり、明器として製作された可能性があるが河北省文物研究所の張曉崢氏より伺った。劉荘遺跡の副葬土器にも焼成が良好ではない例があり、明器であった可能性も否定できないが、器種や器形としては生活遺構と同様であり、一部には煤の付着などの使用痕も認められることから、ここでは日常土器としておく。
- 7) 秦小麗氏によると、墓出土の土器に二里頭文化の影響が強いとのことであるが、少なくとも報告された土器からは明確にそのような傾向を抽出することはできない。
- 8) 公表された図面には方位やスケールなどが入っていないが、文面からおおよその検討をつけることができる。図17もそれに従い作成し、下七垣文化の墓としたものも、文面にある82基と数はほぼ一致するため、大きな間違いはないと思われる。
- 9) 近年、指摘されるように、二里頭文化第4期後葉と二里岡下層1期が時間的に併行するのであれば、下七垣文化末期が二里頭文化第4期に相当するとみる見解と二里岡下層期に入るとみる見解の間に、大きな齟齬がなくなっているといえよう。
- 10) 李志鵬は西史村遺跡の規模をより大きく考える。簡報では東西450 m、南北200 mとされ、確かに文物地図集の記載よりも大きい計算になる。しかし、いずれにせよ、15万㎡を超えるような遺跡にはならないであろう。

【引用文献】

〔日本語〕

- 飯島武次 1985 『夏殷文化の考古学研究』山川出版社
岡村秀典 1993 「中国新石器時代の戦争」『古文化談叢』30(下)：1245-1259
岡村秀典 2005 『中国古代王権と祭祀』学生社
小澤正人 1998 「二里頭遺跡墓葬についての一考察」『成城大学短期大学部紀要』29：109-287
倉林眞砂斗 1988 「集団墓分析論Ⅰ：中国新石器時代馬家窯文化(半山・馬廠期)を例として(一)」『金沢大学文学部論集 史学科篇』8：101-138
秦小麗 2001 「二里頭文化と先商文化の土器様式：豫北地区の二里頭期を中心に」『古代文化』53(3)：121-135
田中良之 1998 「出自表示論批判」『日本考古学』5：1-18
徳留大輔 2009 「威身財から見た二里頭文化の地域間関係」宮本一夫・白雲翔編『中国初期青銅器文化の研究』九州大学出版会，113-150
宮本一夫 2000 『中国古代北疆史の考古学的研究』中国書店
宮本一夫 2005 『神話から歴史へ』中国の歴史01 講談社
宮本一夫 2006 「華北新石器時代の墓制上にみられる集団構造(二)：山東新石器時代の階層表現と礼制の起源」『史淵』143：105-145
渡辺芳郎 1992 「大汶口遺跡墓制考：階層の変異を中心として一」『史淵』129：1-46

〔中国語〕

- 王震中 2010 『商族起源与先商社会変遷』中国社会科学出版社
王立新・胡保華 2011 「試論下七垣文化的南下」『考古学研究』8 科学出版社，179-193
郭瑞海・任亜珊・賈金標 1999 「邢台葛家莊先商文化遺存分析」『三代文明研究』1 科学出版社，32-41
河南省文物局編著 2012 『鶴壁劉莊』科学出版社
河南省文物考古研究所編著 2001 『鄭州商城』上冊 文物出版社
河南省文物考古研究所編 2003 『輝縣孟莊』中州古籍出版社
河南省文物考古研究所 2007 「河南鶴壁市劉莊遺址下七垣文化墓地發掘簡報」『華夏考古』3：22-30
河南省文物考古研究所 2012 『安陽彰鄧』大象出版社
河北省文物局第一期考古發掘領隊培訓班・河北省文物研究所・邢台市文物管理處 2001 「河北邢台葛家莊遺址1996年發掘簡報」河北省文物研究所編『河北省考古文集』北京燕山出版社，46-66
河北省文物研究所 2000 「河北邢台市葛家莊遺址北区1998年發掘簡報」『考古』11：1-96
河北省文物研究所・吉林大学遼疆考古研究中心・邢台市文物管理處 2005 「河北邢台市葛家莊遺址1999年發掘簡報」『考古』2：3-27
魏興濤 1999 「試論下七垣文化鹿台崗類型」『考古』5：65-74
許宏 2015 「關於二里頭為早商都邑的假說」『南方文物』3：1-7
胡保華・王立新 2012 「試論下七垣文化的類型与分期」北京大学震旦古代文明研究中心・河南省文物考古研究所・河北省文物研究所・鄭州市文物考古研究院編『早期夏文化与先商文化研究論文集』科学出版社，296-322

- 鄧向平 2011 『商系墓葬研究』科学出版社
高天麟 2015 「鶴壁劉莊下七垣文化墓地陶器分期等相關問題探析」中国社会科学院考古研究所編著『新世紀的中国考古学(続)：王仲殊先生九十華誕紀念論文集』科学出版社，103-148
国家文物局主編 1991 『中国文物地圖集：河南分冊』中国地圖出版社
湖北省文物考古研究所編著 2001 『盤龍城』上 文物出版社
鄒衡 1980 「試論夏文化」『夏商周考古学論文集』科学出版社，89-169
鄒衡 2000 「“下七垣文化”命名的商權」『中国歴史博物館館刊』1：87-90
石磊・王会民・梁亮 2012 「河北磁県南城遺址浅析」北京大学震旦古代文明研究中心・河南省文物考古研究所・河北省文物研究所・鄭州市文物考古研究院編『早期夏文化与先商文化研究論文集』科学出版社，356-376
中国社会科学院考古研究所編著 2003 『中国考古学：夏商卷』中国社会科学出版社
中国社会科学院考古研究所編著 2014 『二里頭』3 文物出版社
張渭蓮 2008 『商文明的形成』文物出版社
張曉崢 2012 「試論邯鄲地区漳河型下七垣文化遺存」『中国考古学会第十五次年會論文集』文物出版社，202-210
張翠蓮 1999 「太行山東麓地区夏時期考古学文化浅論」『三代文明研究』1 科学出版社，175-185
張立東 1996 「論輝衛文化」『考古学集刊』10：206-256
沈勇 1991 「保北地区夏時代兩種青銅文化之探討」『華夏考古』3：79-88
鄭若葵 1994 「論二里頭文化類型墓葬」『華夏考古』4：63-72
鄭州市博物館 1981 「河南滎陽西史村遺址試掘簡報」『文物資料叢刊』5：84-102
田昌五・方輝 1997 「“景亳之會”的考古学觀察」『殷都學刊』4：1-5
任亜珊・郭瑞海・賈金標 1999 「1993—1997年邢台葛家莊先商遺址、兩周貴族墓地考古工作的主要收穫」『三代文明研究』1 科学出版社，7-25
繆賀娟・劉忠伏 1988 「二里頭遺址墓葬浅析」『文物研究』3：21-34
北京大学考古系商周組 1996 「河南淇県宋窯遺址發掘報告」『考古学集刊』10：89-160
北京大学考古文博学院・河北省文物局・邢台市文物管理處・臨城縣文化旅游局 2011 「河北臨城縣補要村遺址南区發掘簡報」『考古』3：16-29
洛陽博物館 1978 「洛陽東馬溝二里頭類型墓葬」『考古』1：18-22
李志鵬 2008 「二里頭文化墓葬研究」中国社会科学院考古研究所編『中国早期青銅文化：二里頭文化專題研究』科学出版社，1-123
李伯謙 1989 「先商文化探索」『慶祝蘇秉琦考古五十五年論文集』文物出版社，280-293
劉莉著 2007 『中国新石器時代：邁向早期国家之路』陳星燦・喬玉・馬蕭林・李新偉・謝礼曄・鄭紅莉訳，文物出版社

【挿図出典】

図1 SRTMの地形データからカシミール3Dで作成した地図より筆者作成

- 図2 河南省文物局2012をもとに筆者作成
図3 ①：河南省文物考古研究所2012、②：北京大学考古系商周組1996、③：河北省文物局第一期考古発掘領隊培訓班ほか2001、河北省文物研究所2000・2005、任亜珊ほか1999、以上をもとに筆者作成
図4 河南省文物局2012に筆者加筆
図5 河南省文物局2012に筆者加筆
図6 ①-③ともに河南省文物局2012より筆者作成
図7 河南省文物局2012
図8 ①-③ともに河南省文物局2012より筆者作成
図9 ①-③ともに河南省文物局2012より筆者作成
図10 河南省文物局2012
図11 ①-③ともに河南省文物局2012より筆者作成
図12 河南省文物局2012より筆者作成
図13 河南省文物局2012より筆者作成
図14 河南省文物局2012に筆者加筆
図15 ①・②ともに河南省文物考古研究所2003に筆者加筆
図16 石磊ほか2012に筆者加筆

A Social structure of Xiaqiyuan culture focused on Liuzhuang site

Shinji KUBOTA

The purpose of this study is to clarify the social hierarchy and the group structure of Xiaqiyuan culture(下七垣文化), through Liu Zhuang site(劉莊遺跡) of the report that was published in 2012. In addition, through the comparison with Erligang period(二里岡期) and Erlitou culture(二里头文化), to clarify the relative characteristics of the social structure of Xiaqiyuan culture.

The cemetery of Liuzhuang site was formed by two groups over three periods. There is a social hierarchical difference in the Liuzhuang group. Especially, after the second period, the number of burial pottery and its composition also become the element that indicates the social hierarchy, and widen social hierarchical gap. However, the special burial goods, such as “Jue(爵)”, “Gui(鬯)”, “Yue(鉞)”, turquoise and jade, is not consistently connected to the social hierarchy. Therefore, social hierarchical difference is showed by “quantity” and “composition” instead of “quality” of burial goods in the Liuzhuang site. In addition, social hierarchical gap also exist between two groups. Many high-rank graves distribute in the east side cemetery, accordingly, I argue that the east side group is in the leading position of the settlement. However, there is no outstanding position and organized system of social hierarchy, so social structure that existed in Liuzhuang site is not the mature hierarchical society but the initial stage of hierarchization.

Besides, through the analysis of Mengzhuang site(孟莊遺跡) and Nancheng site(南城遺跡) of Xiaqiyuan culture, I clarified that it is possible to apply a social structure of Liu zhuang site to the whole Xiaqiyuan culture. After that, Xiaqiyuan culture accept the meaning of special burial goods and bronze production technologies from Erlitou culture with a more advanced hierarchical structure, and added a new element to the burial customs that lasting from Xiaqiyuan culture. As a result, the burial system of the Shang culture series(殷系文化) is formed.

刘庄遗址所反映的下七垣文化的社会结构

久保田 慎二

关于下七垣文化的等级性和集团结构，至今为止鲜有研究。本文以 2012 年出版的河南省鹤壁市刘庄遗址的考古报告为分析资料，对这一课题进行了探讨。并通过与后续的二里冈时期以及同时代的二里头文化的比较，明确了下七垣文化的社会结构在一定时空范畴内的相对特征。

根据墓葬分布和随葬陶器的型式，可知刘庄墓地是由两个集团经 3 个时期营造而成。集团内存在等级差距，特别是第 2 期以后，随葬陶器的数量和其组合成为标识等级的因素，可观察到等级差距逐步扩大。然而，以爵、鬯、石钺、绿松石和玉为主的非日常随葬品始终不具备标识等级的功能，因而可以说刘庄遗址不是通过随葬品的“质”，而是通过随葬品的“量”和“组合”来体现等级差距。等级差距同样存在于集团之间：本文推断，东区集团应处于刘庄聚落的主导地位。从分布来看，高等级墓葬散布于同一集团内的以家族或辈分为单位的各个墓葬序列，而这样的高等级者贯穿各时期存在的东区集团在该社会中应占相对优势地位。但是，刘庄遗址并不存在等级特别突出的墓葬，而且标识体系也尚不完备，因而不能说是成熟的等级社会，而应视为处在等级化的初始阶段。

本文还通过对同属下七垣文化的孟庄遗址和南城遗址的分析，指出刘庄遗址所反映的社会结构可能普遍适用于整个下七垣文化。随后，下七垣文化从具备更先进的等级体系的二里头文化引进了内包于以酒器为主的非日常随葬品的思想、青铜器的制造技术和其价值观念，将这些新的因素注入了当地既存的以鬲为中心的随葬习俗，并最终形成了二里冈时期以后的商系统文化的葬制。